
我が剣、友に捧ぐ

LUTE

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

我が剣、友に捧ぐ

【Nコード】

N7471A

【作者名】

LUTE

【あらすじ】

かつて理想を共に歩み、共に戦った友がいた。だが、その友は世界に反旗を翻した。自らの命と、剣を捧げた友に、理想を再び説くため、友に身に、男はその刃を捧げた。

序章 捧ぐ理想

「この世界を、終わりにしようじゃないか」

目の前の男、闇を示すかのような独特の目と髪を持つ、自分にとっての最愛の友に言い放つ。

アーチ状の広い天井に囲まれた、神儀を行うための広大な礼拝堂の中に、自らの声がこだまする。

最愛の友の夢のために、理想を目指していた。

理想を実現するために、最愛の友を殺そうとしている。

今、自ら友の死を望むことは、争いが消えないせいだ。

争いを止められなかった、私のせいだ。

崩れた理想を棄て、もう一度、道を探した、争いのない道を探し続けた。

そして、争いを消し去る道を見つけた、もうすぐ、その終焉に到達する。

理想のために、この世界を滅ぼそうとしていた。いや、変えようとしていた。

だが、彼は私の元を去っていった。共に歩むのではなく、相対してしまった。

目の前の敵を、倒すことを考える。

切っ先を友に向け、構えを取る。

敵の後ろには、最も愛しき人であり、心友の一人である、黒衣の聖女が立っていた。

もう決して揺るぐことがないであろうその強い青の瞳は、これから

起こる戦いを最後まで見守ろうとしている。

彼女も、我が下を去り、友のそばにいた、もう、届かないところに行ってしまった。

敵も、こちらに切っ先を向けた。

「ああ、そうだな、終わりにしよう。戦いを、お前の命を…」

悲しき意味を持つ、心友の声がこだました。

今、お前を救い出して見せる。

第一章 勅命

二人の男女が、歩いていった。そこは、石畳で舗装され、石造りの建造物が立ち並んでいる。遠くを眺めれば、その町を守護する、石と鉄で出来た巨大な城壁に刻まれた、蒼く輝く紋章を見ることが出来た。

世界で最も発達した街並みの中で、周囲に目を向ければ、家、道に沿って開けた視界の先の巨大な城壁、再び別の家、そして、街の中央に向かう道を望めば、巨大な城であるかのような、聖王の控えるラグナ聖堂を見上げることになる。

ラグナ聖堂を中心に、まるでくもの巣のように放射状に整頓された街では、約五割がこの景観となる。

その中央の巨大な通りで開催される市の中を歩く二人の内、後ろにいる、深き海のような藍の目と髪を持った女は、法衣というより喪服といったほうが正しいであろう黒き法衣を身にまとっている。その胸に光る紋章から、銀翼十字に所属する修道士ということがわかる。おそらく前にいる男、騎士の従士であろう。

そしてその前にいる騎士は、鎧を着けていない軽装だったが、軽装姿に背の得物は異様だった。その剣は人の背以上はあり、くるまれた布の隙間からちらりと見えたその刃は、いかなる金属で作られたのか、紫紺の輝きを放っていた。さらに、ローブを羽織ることにより、幾分薄れてはいるが、彼自身も異様な雰囲気放っていた、幾戦もの戦場を駆ける兵士よりも禍々しい、血生臭い戦場そのもののような、ひどく黒い雰囲気だった。

この特異な二人が目指しているのは、この王都の中心、聖王のいるラグナ聖堂。聖王はこの世界を治める立場にあり、世界の安定を保っている痕章の総管理者でもある。

王都は、世界の人口の約八分の一が住んでいるといわれる大都市で、周りは五つの城壁に囲まれている。さまざまな場所から商人がやっ

てきており、戦争が各地で巻き起こる現在でも、この城壁の中は人々の生の活気に満ち溢れている。

その活気をかき分け、聖堂の中に入り、聖王や一部の人にしに入ることの許されない神殿部の門の前までたどり着いた。

二人の門衛が、その異様な姿にやや不審を抱きながら槍を門の前に掲げた。

男、剣を前に掲げ、

「戦魂騎士団所属、ヴォルトカルグ・スヴィエート。今回は、聖王の謁見に仕りたく、こちらに来た」

「は、はい。了解しました！ それでは中の控えの間でお待ちになつてください」

戦魂騎士団という名に驚きながら、その剣に敬礼をした。その騎士団に入っているものは、一人で万の軍勢にも匹敵するといわれ、聖王直属の身なのだ。

「そちらの女の方は？」

念のため、後ろについている女性のことを質問する。

「俺の従士だ、通してくれ」

「了解しました！」

待合の間でしばらく待った後、謁見の間に男だけが招かれた。

その大きな部屋に入ると、神秘的なほどその中は静かだった。奥のほうに、聖王が王座に座り、慄然と待ち構えていた。男は聖王の前、約一零歩の所に立つと跪き、剣を横に置いた。

「ヴォルトカルグ・スヴィエート、ただいま着きました。今回の任務は？」

顔を上げて、その戦場でのみいきる苛烈な眼差しを聖王に向ける。年老いたいまでも、聖王の威厳は変わらず、見るものによっては総毛立つほどの覇気は、なぜか今はかげりがさしているように見えた。

「まあ、そうせくでない。今回の戦争の原因、我々教団に謀反したディート・イデアールについてお前はと思う？」

その問いに対して、大衆は、悪だと、殺すべき人間だと答えるだろ

う。

だが、彼、ヴォルトカルグにだけは、それは特別な意味を持っていた。

王側は、その問いで、ヴォルトカルグを図っていた。男が、こちら側につけるかどうか、生きるに値するか否かを。

「私は…」

「まあ、そう硬くなるな、それでは思ったことも口に出せんじゃろうて。思うがままに話すがいい」

慎重に言葉を紡ぎだそうとする。だが、どうしても、胸は熱くなつた。

体の中で焦燥感が募る。冷静を欠いていく。

「…。俺は、俺はあいつを止めたい。理想とともに目指したい」
思い余って、置いてあった剣を握り締めてヴォーグは立ち上がる。

「やめいヴォーグ、この間で武器を持つことは聖王への離反と捉えられるぞ！熱くなるな、らしくないぞ？」

「…すみません」

頭を垂れ、剣を置いた。王の側も踏みとどまったようで、周りに一時殺気があふれたが、それもすぐ消えていた。

「しかし、離反したほうがよいのかも知れんな、気兼ねなくディートの元へつけるのだから」

「それは違う！今のあいつは間違っている！」

止めたい、とヴォーグは断言する。聖王は、それを聞き、次なる命令を下した。

「いや、わかっておる。そこでだ、今度の任務はお前を含む四人の小隊、彼女を含めれば五人となるな。その小隊でディートを独自に追跡しながら、各地を攻略、そしてディートを捕らえてほしい」

それは、再び二人が出会ったとき、倒すべき相手となることを意味していた。

人数の少なさは、動きやすさを追求するため、そして、真の精鋭だけを集めたため。

「…！ わかりました」

決意を、深く、言葉に表す。

「戦魂騎士団もほとんどいなくなってしまった。彼に倒され、あるいは彼の側についてしまった。もう、おぬしらしかおらんのじゃ。

…しかし、ヴォーグには辛い思いをさせるな。本当にすまない」

今の自分の責務に耐えかねたような、疲弊した面持ちでつぶやいた。

「…いえ」

「それでは、今から鉦都ロイコールに赴いてくれ、ここを合流地点としておる。おそらく、戦いも始まっているだろう、至急頼む。なお、これ以降は諜報員を通しての連絡を取る」

「わかりました。それでは」

剣を背負い、礼をするとその場を後にした。

「ヴォルトカルグ様、聖王様はなんと？」

待合の間で待っていたヴォーグの従士、レーナスクリオ・ラエーテルが出てきたばかりのヴォーグに聞いた。

「ディート・イデアールの追跡、討伐だ」

何の感慨も無く、ただ事実だけヴォーグが述べた。

「やはり…、ディートと戦うなんて…おやめください、辛すぎます。私も…見ていられません」

「気にするな、俺は止めてみせる」

拳を硬く握って、ヴォーグは決意を確かめる。

「危険すぎます、私はあなたに死んでほしくありません」

「構うな、お前は…ただの従士だ。付いて来るだけでいい」
突き放すように言い放たれる。

「…：はい、すいません。では、いつ、ここを出ますか？」

「今夜出る、目的地は鉦都ロイコールだ。おそらく四日かかる」

「わかりました、それでは支度をしておきます、ヴォルトカルグ様は宿で休んでいてください」

にっこりと会釈をし、レーナスクリオは外へ向かっていった。

「レイナ！」

少し大きめの声で、呼び止める。

すぐにレーナスクリオ、レイナは振り向く。

先ほどと変わらない笑顔がヴォーグに向けられる。

「すまないな…ありがとう」

「いえ、私は、従士ですから」

そう言ってまた背を向け出て行った。

二人は、どこか悲しい顔をしていた。男は、女の背に向けて、女は、誰にも見られないように。

第一章 勅命（後書き）

えーっと、評価に書き込んでもらうと、すごいうれしいです、酷評とかでも、勉強になるんで、何かしら感想があつたら書いてくださ
い。

第二章 第一話

聖都を出発して三日、ヴォーグ達が来たときには鉦都はすでに戦いの地となっていた。そこで、敵勢力のちょうど真後ろに位置する旅人用の小屋で、闘いの準備をしていた。

「日が沈む頃に敵は侵攻を始める。そこを後ろからたたく」

「はい、わかりました。私は何をすれば？」

「俺についてくればいい、レイナはあまり近づくな。隠れている」
手短かに、指示だけをレイナに送る。

「：はい、わかりました。でも、あなたが傷つければ、私はあなたを癒します」

「戦いの最中は、俺に近づくな。終わってから、頼む」

話が終わると、レイナは台所へ行き、作ってあった薬湯を持って隣に座った。

「飲んでください。それと、魔力を宥めますから、左腕を」

ヴォーグはいわれたままに魔力を抑える効能のある薬湯を飲みながら、左腕だけレイナのほうへ差し出した。

するとレイナは慣れた手つきで箆手はずし、巻いてあった包帯を変えると、更に幾重にも法力に浸され魔力を遮断する布を巻く。それを胸に抱くと、法力を発揮し始めた。

法力とは、天空より授かった聖なる力といわれ、魔力は、冥界より溢れ出した混沌の力とされていた。

一概に法力と魔力は、光と闇、善と悪という二分をされているわけではなかった。ただ、あまりにも強大な魔力は危険な存在とされていた。

「最近、あなたの魔力が昂ぶっています、体は大丈夫ですか？どこか痛い所は？」

心配した面持ちでレイナが問うが、ヴォーグはただ先をにらみ、視線を合わせない。

「大丈夫だ」

それだけ返事をする、黙々と薬湯を飲みながら、ヴォーグは、これから行く戦場をみつめていた……。その先にディートを見据え。

第二章 第二話

「行くぞ」

「はい！」

森の中に立てられた兵舎の群を目視できるところまで進み、ヴォーグは奇襲を仕掛けた。

おそらく今日が山場なのだろう、兵舎の守りは手薄だった。

「敵だ！ 敵が来た！ 後ろからだ！」

「落ち着け！ 一人だけだ、俺たちだけで何とかなる！」

たちまちに残っていた敵兵達が押し寄せてくる。

「我は戦魂騎士団、ヴォルトカルグ・スヴィエート！ 死にたくなければここを立ち去れ！」

「戦魂？ …何だと！？ 怯むな！ 行け！」

聞き取れなかったのか、無視をしたのか、それとも己の欲か。誰一人逃げ出さず彼に向かってきた。

「やはり…。ならば…斬る！」

凄烈な闘気をみなぎらせ、剣を抜き放った。正面から来た敵の首をはね飛ばす。続けざま、肩めがけて横薙ぎにきた剣をしゃがみこんで避け、二人の足を切り払う。足首を斬られた兵の目線が一段下がる。斬られた痛みより、その事実先に気づきながら、兵は絶命していた。かがみこんだ体勢から、すくい上げるように、敵の腕を斬り飛ばす。

次々と斬り伏せていった、まるで、鎧など無いかのようにヴォーグは両断していく。

あらかたの兵を斬ると、今度は兵舎に火をつけていった。これが、最大の目的であった。帰る場所を絶ち、こちらに注意がむかうようにするために。何とか戻る場所は確保しようと、必ずこちらにも兵力を割くだろう。もちろん鉦都が陥落しそうな今、兵舎などには目もくれずに攻め落とせば問題はなかったはずだが、彼らはそこまで

策略を立ててないだろうということもヴォーグは考慮に入れていた。全ての施設に火をつけ終わると、鉦都へ向けて走り出す。

こちら側に来た全ての兵を斬り、鉦都へたどり着くと、そこでは、民を踏みにじりながら戦っている金髪の男がいた。

金髪の男が振り向き、抜けるような空の色をした瞳と、目があった瞬間、ヴォーグは感じ取った。

状況とかそんなものではなく、本能とも言うべきところで。

あいつは、自分の敵だ、と。

「貴様は、俺の…敵だ!!」

ヴォーグは自分でも驚くほど異常なまでに昂ぶり、叫んでいた。金髪の男も同時に何かを吼えていた。

「故に…斬る!!」

「だから!! 打ち砕く!」

まったく同時に、踏み込んでいた…

第二章 第三話

ヴォーグが剣を振ろうかと思った瞬間、さらに金髪の男が加速して、一撃。剣が届くよりも速く、懷に潜り込みわき腹を抉るように拳が放たれる。

武器を持たず無手のようだが、危険を感じ、防ぐのではなく大きく後ろに飛びのく。退きつつ、力が乗らない体勢から、隙を狙ってヴォーグが剣を振り上げる。力が入らなくても、剣が敵に触れさえすれば、たとえ防ごうとも、それは絶対の一撃となる。

だが、男は振り切った腕の力を利用し、すばやく回転、そこからコンパクトに裏拳を放ち、受け止めるのではなく、剣を横から弾き飛ばした。

判断力の高さと、単なる力押しではない技術の高さにヴォーグは感嘆する。

いったん距離を置き、再び両者は構える。今のところの二人の力量は、互角。

すると不意に横から、一人の女が中央に割って入ってきた。その瞳は閉じられている。

だがまるで、攻撃の止むその一瞬がわかっていたかのように、仲裁に入る。

「んだてめーは！」

一目見た瞬間に男の全て、女でもほとんどが確実に息をのむほどの、この世のものとは思えないほどの美女だった。

そんな女性に対しぶっきらぼうなことを言っている金髪の男は人間かどうか疑わしいと思うほどだ。

「だめ……。味方同士は……無益」

女は右手で左腕を抱きながら、感情の灯らない声でつぶやいた。

「み、味方……？」

言葉少なげに語られた事实に、思わず上ずった変な声で金髪の男が

聞き返している。

「理由：ちゃんと聞いて。集った、仲間よ」

「んだと！？　だってあいつ敵のほうから来てたじゃねえか！」

「俺はやつらの注意を引くためにしただけだ。お前こそなぜ民を？」
自分がつけた敵の陣地の炎を指差して、ヴォーグが返した。

「はあ？　あれでめえがやったのか。つかこいつらは成りすましてるだけだ。ちゃんとした敵だよ。内と外から挟み撃ちでもしようとしてたんじゃねえか？」

すでに屍となっているそのひとつを蹴飛ばして仰向けにした。確かに、武器を持っている。

「死者を辱めるな」

蹴飛ばしたことへの怒りだった。

「んあ？　ちっ、とにかくやめだ止め。やる気うせちまった」

あくびをひとつして、金髪の男は街のほうへ戻っていった。

「だから：それは無駄」

捨て台詞に対して、目は閉じたまま去っていったほうに顔を向け、女は理解できないかのように返事を返していた。

「ところで、ほかの敵は？」

「終わった、あなたたちがほとんど：後は私が」

「：お前は誰だ？」

「アーリア：ロザリア。聖王が、よんだ」

抑揚の無い声で簡潔に自己紹介する。

「：！　四人のうちの一人か。さっきの男のことは知っているか？」

「……」

本人に聞けというところだろうか、もしくは知らないのだろうか、うつむいたまま、右手で左腕を抱いて、何の反応も示さなくなった。

第二章 第四話

「ヴォルトカルグ様！ …ハア、ハア、お怪我は…？」

右のほうから、レイナがヴォーグの元へ駆け寄る。彼女は今までずっと走って追ってきていた。

後方での救援が主な役目のレイナでは、従士として戦闘についていくのはかなりの重労働だ。

ヴォーグの目の前でとまると、ひざに手をついて息を切らしながら、心配そうにヴォーグをみつめ上げる。

「大丈夫だ。何もない。…左腕がひどい、後で頼む」

何も傷は無いというのに、ヴォーグは左腕から出血していた。

その、黒いような血を見て、レイナは少しつらそうな表情をする。

「じゃあ、早く癒さないと。さっきこちらから来た男性はなんですか？ 強そうでしたが？」

追いかけてくる途中、レイナは金髪の男と遭遇していた。

男の、ヴォーグとは違った、殺意ではない凄絶な闘気を、彼女は感じていた。

「どうやら、味方だ」

「そうでしたか、敵ではなくてよかった」

安堵の息を漏らすと、今まで近くにいたはずなのに、ほとんど気配が感じられなかった、ヴォーグの傍らにいる女性が目に入った。

「あの…、そちらの女性は？」

不信の視線をアーリアに向ける。その中には、ほんの少し、美女と呼べるアーリアへの女性としての羨望も混ざっていた。

「アーリア・ロザリア。討伐隊の一人だ」

「…来た」

レイナに挨拶するわけでもなく、一直線に伸びる街道のほうを向く、だが、目は閉じられたままだ。つられてそちらに目を向けようとすると、目の前で爆発的な砂塵が巻き起こる。

新たな敵かと思い、ヴォーグが身構えると、それは姿を現した。

「到着♪ ん？ 何？ あ、もしかして聖王の命令で？ 武器持ってるし、周りの感じからしてもそうか、ぼく、クーガ・シュナイド、よろしく♪」

明らかに人の走行を超えた速度を持って目の前に現れたのは、一束だけ尻尾のように伸ばされた赤銅色の髪が印象的な、小柄な少年だった。大人になり始め、まだあどけなさの残る顔立ち。おそらく、身長は平均より低いだろう。

ヴォーグらがまだ状況を飲み込めずに困惑しているというのに、彼はどんどん話を進めた。幾分言葉足らずで内容は理解しにくいが。

「これで四人？ 全員そろった？」

満開の笑みと共に少年が質問をする。

「あと一人…いる」

アーリアがまだほかにいることを、そっけなく、というより感情が全く見受けられない声で伝えた。

「え、でもそれじゃ五人じゃない？ あ、そっか、優しそうな姉ちゃんの方は切れ目の従士か。戦えそうに無いもんね」

クーガと名乗った少年は、すばらしい速さで周りの状況を把握していく。洞察力なのか、勘なのかは判断しがたい。

「あんたたちの自己紹介は後でいいや、そいつがいるところへ集まろうぜ」

その言葉を聞き入れると、アーリアが先頭に立って彼の泊まっている宿へ向かった。

歩く際も、アーリアの目は閉じているが、何の迷いもなく歩を進める。もしかしたら、以前から失明していたのかもしれない。

「先ほどの男性とは、やはり知り合いなのですか？」

レイナが、金髪の男との関係について問う。

「いえ・・・」

その言葉に相違は無い。先ほど金髪の男は、だれだ、とアーリアに怒鳴っていた。その点からしても彼らは知り合いではなかった。

「じゃあ、なぜ、知っているのですか？」

「知りはない。けど、視えていたからわかる」

「視えていた？　じゃあ、あなたはまさか、目を・・・？」

質問をするが、彼女にこたえる気は無いようで、歩みは止まらない。

「ここ・・・」

返答を先延ばししたまま、アリーアは宿の中に入っていった。

第二章 第五話

部屋のドアをノックすると、めんどくさそうな顔をしながらゆっくりと金髪がドアを開けた。

「ん？てめえらか。つるむのはがらじゃないんだがな。命令となりやしようがねえか」

出し抜けにそんなことを言い、しぶしぶといった感じで中に招き入れた。

部屋に入ると、ヴォーグは中央のテーブルに面した椅子に腰掛けた。その斜め後ろに、寄り添うようにレイナが立つ。クーゲルは、壁に寄りかかり、寝ているかのように腕を組んで目を閉じていた。アリアはドアから最短距離にあった椅子に座っていた。クーガは、狭い部屋の中を歩き回って内装を観察しているようだ。

「俺の名前は、クーゲル・ツェアストレ。戦魂騎士団所属『業穿つ者』だ。クーゲルと呼んでくれりゃいいよ」

金髪の男はクーゲルというらしい、『業穿つ者』その称号を持つ者は、あらゆるものを破壊せしめる力を持つと言う。

「ぼくはクーガ・シュナイド…」

「んだ、大丈夫なのか？ チビ：！？ グヘッ！ クソ、何しやがる！」

クーゲルがあざ笑うかのようにふざけた調子でチビ、と言った瞬間、その顔面にクーガの足が突き刺さっていた。そのとき、若干だが、金の瞳は、猛禽を思わせるような鋭さを宿していた。

「うっせ！ チビとかガキとか言ってるじゃねえよ！ ぼくはクーガ・シュナイド。聖騎士団のクーガだ！『風如し者』だ」

もう一発蹴らんばかりの勢いで、一気にクーゲルをまくし立てた。聖騎士団は、その身に痕章の刻まれた、優れた騎士の集まりである。痕章は、人の体に刻むものでは本来ないが、危険は伴うが刻むことにより絶大な力を得ることができた。

痕章を刻んだ兵は、その痕章の種類によるが、数百、数千の兵と力を拮抗させることもあった。

「その、戦魂騎士団ってのは何？ さすがに聖騎士団になって名前くらいは聞いたことあるけど。ぜんぜんしらなあい」

「ああ、そいつはなあ、死痕といわれている、秘儀にあたる力を持つ痕章が刻まれた騎士たちのことだ、正確な人数は俺もしらねえよ。まあ、半分ほどあっち側についてしまってるらしいがな。んで、死痕てのがこれ、黒いだろ？」

そういつて襟元を引っ張り、右肩から胸にかけて描かれた、文様の描かれた焼きごてを押し付けたような、火傷の痕のような通常の痕章とは違う、精緻な文様の描かれた黒き傷痕を見せた。

先ほど蹴られたばかりの相手の質問に、律儀に、自慢げな説明をした。説明の中で、敵にもいることを示した。

「じゃあ、あんたは名前はなんていう？」

クーゲルは、最初に部屋に入ってから何の反応も示さずにただいすに座っていたアーリアに声をかけた。

「聖騎士団：アーリア・ロザリア」

ゆっくりとクーゲルに顔を向けると、ただ自らの名前と団の名前だけを伝えた。

「ロザリア？ てことは『万象を視る者』なのか？ 何で目を閉じてるんだ？ 意味がねえじゃねえか」

クーゲルがアーリアを一瞥しながらつぶやく。

不思議そうにクーゲルが顔を覗き込もうとする。

「普段は、いないから」

視線をアーリアは感じ取ったか、それとなく顔を背ける。

「はあん。まさかこんなところでお目にかかるとはな」

嘲るような、しかし悲しみも含んだような目をクーゲルがした

「え、何々、ロザリアって何？」

クーガが会話に頭を突っ込む。

「ロザリアの痕章はな、今までほとんど刻まれたことのない痕章な

んだよ。しかも刻まれた者はすぐに死んでいるらしいな。大体はその痕章の傷のせい、それ以外でも結構ひどい死に方をしたらしい。力についてはなんかいろいろ視ることを出来るらしい。そんぐらいしかしらねえよ」

簡潔に大まかなことを説明する。このときもやや自慢げで、おそらく自らの知識を示すことがすきなのだろう。

様々なものを見る力の痕章、彼女の、視えていたということの意味は、このことなのだろう。

「いや、十分な気がするんですけど…。すごいんだねえ。どこに刻まれんの？」

クーゲルの説明に感心しつつ、重ねて、興味の対象のアーリアに質問をした。

「目よ…」

「ちよつと見せて」

「いや…」

「…じゃあさ、名前、なんて呼んだらいいの？」

「何でもいい」

アーリアの必要最低限の一言によって、気まずい空気が漂って会話が止まる。

「…ま、いいや…。じゃあ、切れ目の名前は？」

居心地が悪くなったようにヴォーグに話しかける。

「戦魂騎士団、ヴォルトカルグ・スヴィエート『聖殺の剣』だ。ヴォーグでいい」

「はじめて聞く称号だな。それも聖殺の剣か。それを持つ者が行う殺しは聖なる裁きであり、罪ではない、だっけか？」

考え込むような顔をしつつも、すらすらとその名を示す聖典の一説を説く。

「らしいな。だが俺は持つ者じゃない。剣だ。力自身の象徴だ」

「それはご苦労なこと。てめえは誰かの所有物かよってんだ」

称号は、与えられた人間を現すものであり、末尾には『者』と記さ

れるはずであり『剣』などという称号は本来ありえないはずのものであった。その称号を与えられたヴォーグを、人としてみていないかのように感じさせた。

クーゲルはさっきのこともありヴォーグを嫌い、はき捨てるように言った。

「そうかもしれんな」

それは、確かなことで、その名を使うときは、ヴォーグにとって自分は一人の男の所有物であって、兵であった。

そんな自分を否定するような言葉を聞いてクーゲルがむかついたのか、一瞬、険悪なムードが漂う。

「え：えっとさ、ヴォーグ、後ろの人、従士なんでしょ？」

あわててクーガが話題を変え、場の雰囲気崩す。

「ああ、そうだ」

目配せをし、レイナを促す。

「あ、はい、私、ヴォルトカルグ様の従士の、レーナスクリオ・ラエーテルです。この称号は、銀翼十字の「癒す者」です。よろしくお願いします」

銀翼十字は、全ての修道士や聖人などを統率する機関のことで、修道士の育成も行う。その立場は永世中立とされ、今回の戦争にも参加はしていないが、個々の教会ではどちらかに身を寄せているところもあると言われていた。

彼女らは体に痕章は刻まず、自身や大気が持つ法力や魔力を修行によって操り、独自の力を得ている。

「なんて呼んだらいい？」

「お好きなように。周りからは、よくレイナと呼ばれています」
微笑みながら返事を返す。照れるのか、つられてクーガも笑う。

「全員、終わったな。これからのことについて、レイナ、頼む」
あらかたの自己紹介が終わると、ヴォーグが合図を送り、本題を切り出した。

「俺たちの任務は、ディート・イデアールの追跡、および誅殺、だ

よな。けどどこにいるんだ？まったく情報がないぜ？」

「彼の計画からおのおのずと居場所は出ます。そしてその目的は、聖典の、『終末の黙示』です」

「空間、時間、次元の世印揃いし時、魂と体二つの存在めぐり合い、『開放の存在』現われ、空は消え大地は海に沈み、存在を消滅しせり、永遠の存在となる…だろ？　こんなただのおとぎ話だろ？

だいいち矛盾してるじゃねえか、なんで存在がなくなる、つまりは何もかもなくなるはずなのに『開放の存在』だかが存在し続ける？

やっぱ壊した張本人だからか？　それにこの体に魂はある。めぐり合ってるだろ？　じゃあ俺らが開放の存在か？　世印なんて聞いたこともないしな」

再びかみもせずにすらすらとクーゲルが一節をしゃべると、続けざまに疑問を投げかけた。

「全ての存在が一つになれば、個々としての存在は無くなるという事です。これは、世界を滅ぼす神の秘儀であり、世印は各所に散らばり嚴重に封印してあります、そしてディートはこの秘儀の詳細が描かれている、神典を持っています」

「ねえねえ、そんなすげえ危ない秘儀が何であんのさ？　世印っていうのを消しちゃえばいいんじゃないの？」

横合いからクーガが聞いてくる。これは、当然持つ疑問であろう。

「もっともな話なのですが、世印自体がこの世界を保つものらしいです」

世印は世界の理を保つものとして、この世界の形を形成しているといわれ、その消滅は世界そのものの秩序が壊れることを意味していた。

「じゃあさ、その秘儀が目的なら、世界滅ぼそうとしてるってことでしょ？　じゃあその痕章を壊したほうがディートは早いんじゃない？」

「あいつの目的はそうじゃない、魂の開放をしようとしている。だからこの秘儀を行おうとしているんだ」

ヴォーグが、ディートの目的を語る。ヴォーグ自身は冷静でいようと、感情を押し殺すように言っていたが、その気配を周りに悟られはしていなかった。

「ちょっと待て。何でてめえはそんなやつが企んでることを知ってるようにいう？　なんかあるんじゃないかねえのか？」

「：関係ない」

彼は何かを知っていたようだが、それを口にするつもりは無いらしく、クーゲルは信用ならない相手に不満を持った。

今度は陰悪なムードなどではなく、殺気が帯びていた。ヴォーグは、常に殺意のような、禍々しさを秘めた何かを周りに放っていたが、それを明確な形でクーゲルに集中させていた。

「：やめて、無駄。話を進めて」

「すまない」

アーリアが仲裁に入り、ヴォーグはそれにわびるが、相変わらずクーゲルが殺気立っていた。

「それでは、続きを。ディートが手に入れようとする世印の場所がここに示されています」

レイナが地図を取り出し広げると、三つの赤い目印があった。そして、青い点と緑の点の一つずつ。緑の点はこのことを示していた。

「彼・・・ディートが二日前発見された場所がこの青い目印です。一番近い世印は、水都エセルの遺跡にあります。先回りして、ディートと接触する予定です。そのために聖王はどこにでも対応しやすいここを集まる場所として選びました」

「なら早いほうがいいね。今日にも出るの？」

「そうだな、今夜にでも：」

「それはだめです。戦いの疲労を今夜は癒してください。出発は明日の早朝でも間に合います」

休憩をはさめと、レイナが優しい口調で、しかしはっきりとした意思をこめていった。

「だが：」

「だめなものはだめです」

レイナの断固たる意思は折れない様で、ヴォーグが折れた。

「あ、ああ。わかった、明日の朝にしよう。それでいいか？」

「はい、ありがとうございます」

「ぼくは別にいつでもいいけど」

「私も、構わない」

二人が同意の意を示す。

「全く、やってらんねえな。俺は勝手に行かせてもらうぜ」

「だめです、あなたも戦ったのなら休んでください。それに聖王の命令であなたや私たちは行動をともしなければいけません」

「…ああ。わかったよ。しょうがねえな」

レイナの諭すような説得に、案外と素直にクーゲルは折れた。

第二章 第六話

結局今夜はクーゲルが泊まっていた宿屋に全員泊まることとなり、夜を迎えていた。

「えー、この部屋ベッド一つじゃんよー」

クーガとアーリアが二人で一つの部屋に泊まることとなり、その部屋に入った途端にクーガが落胆の声を上げた。

「やっぱりクーゲルの部屋に泊めてもらうかなー。つか女と二人はちよつとごめんだ」

「どうして？ 変わないよ：あの部屋も：一つ」

「いや、ベッドで寝たいわけではなく、まあ、とにかくアーリアと二人だけってのはちよつと・・・」

アーリアはあまり気にしないのか、冷静に（というものの冷静以外の彼女の反応は無いが）判断をしていた。

「ま、とにかく行って来る。一人で寝てて」

「わかったわ」

部屋を出て、クーゲルの部屋までの廊下で、こんなことを考えていた。

どうも、アーリアには表情というものが無い、と。

別に笑ったり怒ったりするような出来事は無かったのだが、それでも何も変化が無いというのはさすがにおかしかった。声にも感情の起伏が感じられなく、あえて言えば人形のような印象を与えていた。

「にしてもきれいだよなあ、うん、なんか好きだ」

率直な意見をつぶやいていた。まるでガラスの様に綺麗な、銀ともいえる不思議な色合いの髪は、クーガの好みだった。

そんなことを考えているうちに、部屋の前へとたどり着く、とはいっても、元からあまり離れてはいないのだが。

ノックをしながら、中に呼びかける。

「なあなあ、ぼくだけどさ、ちよつとここ開けて」

だるそうな顔をして、部屋主が出てくる。

「ああ？何だよ、部屋いったんじゃねえのか？忘れ物でもしたか？」

「いや、そうじゃなくてさ、やっぱりこっちで寝かせてくれない？」

その言葉に、クーゲルは無言でドアを閉めようとした。意味の無いガキの駄々だと判断したのだろう。

「ちょっと待ってよ。何でさ！別にいいじゃん」

あわててドアをつかんで閉めるのをやめさせる。

「女と一緒に部屋で寝るくらいそれこそどうでもいいじゃねえか」

「え？やだよ。恥ずかしい」

やはり、気になる異性とそんな状態になるのはクーガにとってはあまり無い経験だ、それもまだ知り合って一日もたってないという状況。

「俺もガキと同じ部屋で寝るのはごめんだね」

相手を小ばかにしたような、ガキという物言いにクーガの顔が怒りに染まる。

「んだとく！」

今度は蹴りが来る前に、部屋のドアは閉められた。

「くそ！むかつくな。しょうがない、別に一日くらい、てかなんかやましい事があるわけでもないし」

としぶしぶ部屋に引き返していく。

「どうしたの」

「いや、追い返された」

さすがにまだ寝てはいなかったようで、ベッドから身を起こして聞いてきた。

暗がり目慣れるまで気がつかなかったが、アーリアの姿をみて、思わず赤面する。

布団を手で押さえて見えないようにしてはいたが、肩あたりのところを見て、上裸か、もしくは全裸ということがすぐに想像出来た。

「…だ、だから、俺は、あっちのソファで寝るから、き、気にしないで寝てていいよ」

その言葉に反応して、なぜかベッドから出てこっちへ来た。クーガはすんでのところの後ろを向き、何とか見ないですむ。だが、それ以上は体が硬直して動くことが出来なかった。

心臓が、破裂しそうなほどに鼓動が早くなる。戦場の緊張感でも、そうはなつたことはない。

顔も、湯気が出そうとはまさにこのことだ、脳の組織がやられそうなほどに熱い。

後ろまで来ると、唐突に、逃がさない、という感じで、後ろから抱きしめられる。思わず心臓の鼓動とともに跳ねてたが、それでも拘束は解けない。

もう、何にも恥ずかしくないとか、羞恥心ゼロとかではなく、誘っていると思えない。妙に声も艶かしい気がする。彼女の、まるで霞んでしまいこの世のものではないかのような綺麗な声が自分は好きだというせい、気のせいだろうか。

「ソファは：冷えるから、ベッドで寝て」

優しいことをいつている、だが、それは感情から出たことではなく、一般常識からしての、ただの、当然のこと。

おそらく、これから共闘する相手に体調を崩されては自らにも被害が及ぶという考え。

彼女には何の感慨も無かった。

「え、でも、じゃあアーリアは？」

「：私も、ベッドよ：？」

さも当然のように、異性同士が同じベッドで寝ることを宣言した。

「今どんな格好してるのさ？」

「：裸」

しかも、自分自身が裸という状況で。

「や、やっぱり、ぼくはソファで：」

「ダメ、暖かくして寝る」

ちよっと待て、服は？ 暖かくしようよ？

主張する暇も無く、引きずり込まれる様に、ベッドの中に入る。そ

れが一緒に寝ることを受け入れたと判断したようで、すぐに寝る体勢に入っていた。

そろそろ、ねたかな。

クーガがそろそろとベッドから抜け出し、ソファに行こうとすると、不意に後ろから手をつかまれ、

「まだ…寝れない？」

またもや引きずり込まれる。というかまだあなたこそ寝てなかったんですか、と言いたい。

無言で、しかも今度は正面から抱きすくめられる。

「疲れは、取らないと駄目」

いや、余計に無理ですから！ いやゝ！ 何この状況はゝ！！
思わず叫びたくなった。

クーガの思いなど微塵も無視してまたゆっくり規則正しい呼吸に彼女は戻る。

しかももうあなたは寝ようとしてるし。

いや、確かに心地良いですよ！ いろんな意味で！ でも眠れませんか！ 絶対無理！ 寝たら死んでそう！

結局放してはもらえず、何とか腕の中で後ろを向いた。

ふと、気づいたことがあった。彼女の体温が低いのだ。冷え性なのかとも思ったが、どうやらそれは違うらしい。今現在クーガに触れている体全体が、低い。そしてその温度は、冷たい印象を与えるようなものではなく、彼女の心と同じように、空虚さを感じさせるものだった。

更に、アーリアを意識してしまっていることに気づき、鼓動が早くなる。

そして、眠れない夜は続いた。

第三章 第一話

「ふああゝあ」

大きく伸びをしながら、クーガが欠伸をした。

「なんだ？ 子供が夜更かしなんかしてんじゃねえよ」

クーゲルが茶々を入れると、その瞬間に蹴りが来る。すかさず蹴りをかわしながらカウンターをあわせる。直撃するかと思われた瞬間、独特の体捌きでそれをクーガがかわす。そんなちよつとしたちよつかい一つを取っても彼らが相当な強さを持っていることが見受けられた。

「アブねえじゃんかよ！ あたったらどうすんだよ！」

「んじゃてめえは何なんだよ！ 蹴ってどうする蹴って？」

そのまま取っ組み合いが始まる。今は、水都を目指し鉦都から延びる大河に沿って南下していった。その広大な大河は、さまざまなのを運ぶ運河にも使用され、今も横にはちらほらと船が見えている。

「あの二人、止めなくて良いのですか？」

「放っておけ」

無造作に返事を返す。

「にぎやかですね」

微笑みながら、レイナはそんなことをいう。

「そうだな。久しぶりの、気がする。…少し、急ぐぞ」

いいつつ、あまり歩みの速度は速くしない。だが、それで喧嘩は一応収まる。

そして、昔のことを思い出し、空を仰ぎ見る。誓い合った日々のこととを。

ずっと前、この争いが始まるよりも以前、ヴォーグは、この大河に敷かれた道を、三人の友と歩いていた。

傍らに歩くのは、落ち着いた黒色の長髪と、黒曜石を思わせる鋭い光をたたえる知性的な黒瞳を持つ男だった。

後ろを歩く二人は、すでにこのときから従士だったレイナと、女性がもう一人。

女性の顔は、よく思い出せなかった。だが、それが当然のように思いい、深くは考えない。

ヴォーグと、男は、飽くことなく二人の夢を語り合っていた。ともに歩み、平和の世を作り出す、壮大な夢を。

「やっと、人々が集い始めた、ここ最近は順調に進んでいる。もう少しで、俺たちの夢の頂点が見え始めてくる。」

得意げに、本当にうれしそうに、男はヴォーグに話す。それにヴォーグも笑顔で聞き入る。

「ああ、そうだな、見え始めてきた。お前が、最高の王になるっていう夢が。」

夢、それは途方も無かった。

争いは、勝つだけで消えることも無い、一人の意思で消えることも無い。

だから、男は、この世の全てを支配し、最高の王の下に、全ての争いを消そうと考えた。

「なら、あなたはいったい王になって、どうやって争いを消すの？」
後ろにいた女性から疑問がわく。まだ彼女には、教えていないことだった。

「それはね、全てを棄てるんだ」

ヴォーグが得意げに彼から聞いた話の一言を言う。

その理想を聞いたとき、ヴォーグの胸は高鳴った。どうして、そんなことを考えられるのだろうと、彼を心の底から尊敬した。

「棄てる？」

「ああ、棄てるのさ、物事は、根本から消し去らなければ消えることはない。なら、争いの原因はなんだ？」

男が話を継ぎ、人差し指を立ててなぞなぞのように彼女に質問する。

彼は芝居がかったようなしぐさで話すのが得意だった。その演技は、大衆を動かす力を持っていた。

「・・・人の、心。私欲とか、そういう、闇の部分、かしら？」

彼女がしばらく悩んだあと答えた。それは、ひどく悲しい答えだ。だが、ヴォーグもかつて同じ質問を男からされたとき、同じような答えを導いた。

「ああ、それだ。人は、やはり、同属を殺したくなってしまう。だが、それは、個人が持つ心だ。変えようのないものだ。だから、私は、妬み、恨み、そんなものは抱かない世の中を作りたい、そのために、貧富の差や何から、全てを、平等にする」

「それだけじゃ、争いは、消えないわ。あなたも言ったでしょ、人は、人を、殺したくなるって。それは、どうしたって抱く感情だわ」

「そう、完璧じゃない。どうしたって人の心に影は射す。だから、殺せないようにする。全ての武器を、この世から無くす。武器は、人のその部分を増徴させる。自分の持つ武器も、全て、無くす。相手が武器を持っているから、それから身を守るために武器を持つ、生きるために、人を殺す、そんな矛盾を、全て無くす。だからまず、私は自ら武器を棄てる。何も持たない相手を殺そうとするやつなんて、いないだろうからな」

「すごい、それなら、本当に、消えるのかもしれないわ。でも、最後のことは、無理よ」

素直に女性は感心するが、ヴォーグとまったく同じ部分を、彼女も否定した。誰しもそれは、不可能なことだと思うからだ。王の座を狙って、誰かが必ず殺しに来るはずだと考えた。

「だが、自分が武器を持っているのに、相手に棄てろといっても、誰も聞きはしないだろ？ だから棄てるのさ。それに、俺を殺そうとするやつは、道を上るあいだにもう全部いなくなってるさ。そのために、俺は戦ってる。ヴォーグに戦ってもらってる」

そんな考えは、誰も思いつけない。彼だからこそ、考えついたのだ。王になったとき邪魔なものがあるのなら、王までの道あいだに、全

てを誘い、潰してしまおうと。さらに彼は、その戦いで、敵でさえも救い、完璧に戦いを終わらせることも出来る人間だった。彼でなければ、理想は叶うことのないものだった。

「だから俺は、王となるための、剣となる。何人にも負けない、最高の剣にな」

「そして私は、お前を存分に振るって、最高の王に上り詰めよう」手を大きく広げてわざとらしく男が振舞う。

ヴォーグたちは、平和を目指す過程で、争いをするをいとわなかった。それは、決して間違っではない、決意だけ振りかざしても、世の中が変わることはありえない、そんな世の中だからこそ、争いは消えないからだ。

「だけど、お前は、王になったら剣を、全ての武器を、この世から無くすんだよな。となると剣でしかない俺は、そこで、用無しだな・・・」

途端にヴォーグの顔にかげりがさす。その言葉に、男の体がわなわなと震えた。

「ふざけるな！ なぜいつもそうやって自分をないがしろにする！

自分には必要ないんじゃないかと、なぜ自分で考える。俺が言う、俺にはお前が必要だ！ この道を上るための剣としても、そして、道のさなか、上り詰めた後もずっと、友として・・・」

男は怒鳴って顔を赤くし、そこには、いつもの冷静な彼ではなく、ただ友を思う男の姿があった。

だが、それでヴォーグは救われた。

彼は、男にいつも負い目を感じていた。

彼は王となろうとしている、だが自分は戦うものだ、なら代わりはいくらでもいる、と。

自分の生まれのせいで、彼を闇へ引きずってってしまうのではないかと。

・・・彼を・・・殺してしまうのではないかと。

だが、それさえも男はやすやすと跳ね除けた。自分が必要だと、い

ってくれた。

「ありがとう」

その一言で、二人は笑顔に戻る。

ずっと静かに見守っていた女性が、二人のやり取りに小さく弱音を吐く。

「あなたたちは、すばらしいのね。互いに、信頼しあって、二人で登ることが出来るから。私は、あなたたちに何もすることが出来ないわ。その道に、私は必要ないのね」

まるでそれは、助けを求めているようでもあった。

二人が、共に戦い、共に理想を歩むのに、彼女はその理想を知らなかった、そのことへの、嫉妬からだった。

その言葉に、二人は急におどおどとする。自分は必要ないといったヴォーグに怒鳴っていた男でさえも、壊れてしまいそうなほど繊細な印象を持った女性が弱音を吐いたことに、あせりの表情を浮かべた。

「そ、それは違う。お前が後ろで守ってくれなければ、俺たちは戦えない。癒してくれるものがあるからこそ、戦える。それに、お前を守ろうとする、それだけで、俺たちは強くなれる。帰る場所があるからこそ、生き残ろうと思える。」

最初は恥ずかしがっていたが、一言口になると、歯止めが無くなり、思っていた全ての心の内を出してしまっていた。

自分が言った事が恥ずかしくなって、ヴォーグは視線をそらして空を見た。

はっとした表情の後、女性は目を閉じる。

静かに胸に手を当て、その言葉に染み入るように聞き入っていた。

「俺も、ヴォーグと同じだ。それに、ヴォーグもおそらく同じことを思っているだろうが、俺たちは、お前がいるだけで、癒される、体も、心もな。それは、ほかの誰でもない、お前だけしか出来ないことだ。だから、お前も一緒に歩んでくれ。俺たち三人で、目指すんだ」

しゃべり終わると、男も同じように顔を顔を赤くして空に視線をそらす。

二人のしぐさは、非常に似ていた。

二人の言葉に、彼女は、泣いた。

必要とされたことが、三人であることが、彼女はうれしかった。

だが、男たちは彼女が泣いているのを見ると、自分が何か悪いことを言ったかと、先ほど以上に慌てふためいていた。

「少し、急ぎましょうか」

ようやくその涙が止まったところ、終始見守って付き従っていたレイナがそういって、全員が前を向いた。

そして、歩き始める。理想へと続く、その道のりを。

第三章 第二話

「うわ、まるで浮いてるみたいだ。すっげー！」

クーガが目前にまで迫ったエセルに感嘆の声を上げる。

向こう岸がほとんど見えぬような巨大な川に、人が住むための町並みがそのまま横たわっていた。

「水都エセルか、俺もこの目で見るのは初めてだな。何でも、昔この河の近くにあった村が元らしいんだけどな、このでかい川はな、運河として、流通の大動脈を担ってるんだ。それで、より効率よく物資を流通させるために、どこかの酔狂な奴らが、大河の上に、街そのものを作っちゃったんだよ。その後、運河の中継地点、貿易の要として、発達していったんだとよ」

街の成り立ちについてクーゲルが語った。

「へえ、よく知ってるね」

クーガが素直に感心する姿をクーゲルも楽しんでいる。

「で、そのときに大河の下にあった遺跡が出たんだとき。まあ一つ一つの町のある程度のことは覚えとけよお前こそ」

「いや、普通に無理だしよ！」

何百とある都の細かい特徴など、自ら進んで知識を蓄えなければ、到底覚えられるはずも無い。平然とそれを言うということはクーゲル自身は当然覚えているのだろう。とんでもない記憶力の持ち主だった。

「ねえ、なんか変じゃない？」

もうすぐ水都の入り口という所でそんなことをクーガが口にする。

「あ？　どうかしたか？」

クーゲルが疑問に疑問で返す。

周りの状況に特に何も変わったようなことなど見受けられないためだ。

「音が…しない、それに、血の臭い…」

アーリアが川の音の中に町のにぎやかさというものが欠けていると
いうことに気づいた。

「やっぱし！？　じゃあ急がないと！」

クーガは駆け出し、その後にそれぞれ続いていく。

「こりゃ：ひでえ」

水都は、血の海となり魔力が充満していた。魔力が空気を混沌とし、
大地を殺していた。

剣で切り殺された者、焼き殺された者が地に転がっていた。

むせ返るほどの血の臭いと、人の焼ける臭いが鼻腔にこびりつく。

「ヴォルトカルグ：様、これは、もしかして：」

「ああ、おそらく：ディートだ」

レイナが深刻な顔をする。まるでこの惨状が自分のことのように、
その表情には苦しみがあふれていた。

複雑に絡む心の中に、安堵があり、それはより大きな罪悪を生む。

私が急ぐのを止めたせいで、街の民は死んだ。私が、殺した。

だけど、もう少し、早く来ていれば、彼は、ディートと戦っていた
かもしれない。今なら、もう会わなくてすんだのかもしれない。彼
が、戦って命を落とすことは無い。

自分の、ほかの命をむげにし、たった一人をかばうエゴという秘め
た心に、レイナは罪を感じた。

「俺は遺跡に向かう！　クーゲル達は無事な者がいないか町を探し
てくれ！」

一目散に町の中央、この橋を作った時に発見された遺跡の入り口へ
ヴォーグは向かう。それをクーゲルが追いかけた。

ダメ・・・命を棄てるようなことは、しないで欲しい。

だが、ヴォーグを引き止めるために、声を出すことは出来なかった。
彼女の心の叫びは、ヴォーグに届くことはなかった。

第三章 第三話

「俺一人で十分だ！」

走りながら横に來たクーゲルにヴォーグが呼びかけた。

「てめえに指図されるつもりはねえ、それに町のやつらなんてどうだって良いんだよ。俺はあいつを殺しに來た！」

「民がどうでもいいだ！？」 それに俺はあいつを止めにくた、殺さない」

「ふざけんな！ 殺さねえだと！ あんなやつをか！」

クーゲルが前に立ち塞がり、走行が止まる。

「てめえは何だ！ 何知ってやがる？ …クソ、時間がねえ、てめえのことは後だ！」

今度はクーゲルが先に立つ。

遺跡の入り口にたどり着くが、立ち止まらずにそのまま彼らは突っ切った。

奇襲も予想されたが、遺跡の中は、異様なほどに静まり返っている。しばらく、ヴォーグとクーゲルの走る音しか聞こえなかったが、やがて最深部の開けた場所にたどり着く。整然とした祭壇の間となっており、痕章により強度を増した、蒼く輝く文様が写る天窓から、川越しに月の淡い光がにわかには差し込んでいた。

二人は走るのをやめた。中には、人影が一つ立っていた。

「待っていたぞ、聖殺の剣、業穿つ者よ。遅かったな、すでに世印の一つは我が手の中にある」

すでに遺跡の深部にはディートが待ち構えていた。右手に血塗られた漆黒の刃を握っていた、だが、その身も、それを包むマントも、血が一滴もついてはいなかった。左手にはすでに神々しく光る世印の一つを刻まれている。

「なぜ、このようなことをする！」

「私は平和な世を作る。そのための犠牲なのだ…」

理想を忘れぬような言葉に、わずかに希望を抱いたが、それは所詮無意味な死の上にある理想だった。

「そう、魂の開放だ！　それがこの世の正しき道だ！　ヴォーグよ、その血塗られた手からは死しか生まれん！　それをなくそうといっているのだ。私を止めようとは思うな！」

「何で、お前が……」

かつて自らを救った友に、ヴォーグは否定された。死しか呼ばぬ血塗られた手、と。

ずっと信じていたのに、お前しか信じられなかったのに。

俺を、おいていくのか。俺を置いて、行ってしまったのか。

ならば……殺そう。

掛け替えのない親友だから、殺す。

親友だから、殺しちゃいけない。

殺したくない、殺したくないのに……

大切な者だから、殺したい。

傷付けられないためにも、傷付けないためにも。消し去る。

いや、違う、止めるんだ。そしてまた同じ道を……

殺して……救ってやる。

頭の中に思考が駆け巡り、一瞬ヴォーグの動作が停止する。

「俺は……お前を……」

「てめえらごちゃごちゃうっせエ！　お前が死ねば、全部終わるんだよ！」

二人の会話に割って入るように、クーゲルは地面を蹴り抜いて加速、ディートの懷に飛び込み、必殺の一撃を放つ。

だがそれを難なく避け、ディートはクーゲルの右脇腹に刺突を放つ。深々と決り、漆黒の刃は貫通、そのまま左肩まで駆け上がるようにするが、すばやくクーゲルが反応、刃に左拳をたたきつけ、刃を右へと抜けさせる。

腹から大量の血をこぼしながらも、反撃の右の拳打を放とうとするが、黒き衝撃に体ごと吹き飛ばされ、壁に激突し、苦悶の声を上げ

つつ、気絶する。

遅れて反応し、ヴォーグは剣を構えたが、体に黒い靄のようなものがまとわりつき、自由が利かなくなる。

「私に刃を向けようとするか。まあいい、その命、魂の終着の時まで、預けておく」

悠然とした動作で、遺跡からディートが去っていく。

呪縛が解け、追おうとするが、すでにその姿は霧散していた。

ヴォーグはすぐさまクーゲルの元へ駆け寄り、傷の応急処置をする。

「まだ生きているか！」

「俺のことなんかどうでもいい、早くあいつを殺せよ……」

いったい何が、彼をそこまで駆り立てているのだろう。

狂気のなまでにディートの殺そうとつぶやき続けるクーゲルを抱え、急いでレイナの元へ向かった。

第三章 第四話

段々と意識が戻る。ゆっくりと重いまぶたを開けると、靄の中に人影が写る。

「気が、つきましたか？」

「ん、ああ、なんとかな、え」と…」

クーゲルは頭の中に白く霞がかかったかのようにだるい意識を、少しだけ休んで明瞭にしていた。

「まあ、ありがとうな、おかげで助かった」

「お礼なら、ヴォーグに言ってください。応急処置が適切だったおかげで、直しやすかったですし」

「あいつになんかいわねえよ」

ふてくされたようにクーゲルはいい、それにレイナが微笑した。

なぜかレイナの言葉に違和感を感じ、それを整理しようとクーゲルはしゃべりつつ頭を回転させる。

「そんなにヴォーグを嫌がらないでください。あの人は優しいんですよ？」

クーゲルは案外と簡単に、その違和感に気がついた、どうということはない小さなことだが、その疑問をつく。

「やけになれなれしくねえか？ いつもヴォルトカルグ様なんて長ったらしく言ってたのにヴォーグなんてよ？」

ただ相手の呼び方の違いだけ、いつもはなぜか従士と騎士の関係以上に堅苦しい会話をしているのに、今はそれが無く、それ以上に親しい感じがしていた。

「えっ、あ、そうですね。内緒にしておいてください」

勤めて冷静な態度をとる。唐突過ぎる変化は、逆に疑問をあからさまなものにした。

「いや、つうかさ、あんたとヴォーグってどういう関係なんだ？」

「従士と騎士ですが？」

そっけなく答え、レイナは質問を流そうとする。

「嘘をつくなよ、もっと深いだろ？」

ふー、とレイナが息をつく、どうやら観念したようだ。

「古くからの同志です」

「恋人とかじゃねえのかよ？」

茶化するように、率直な意見を述べる。

「違います…。そんなことは考えたことも」

なぜか、その言葉に嫌悪するかのように視線をはずした。

「じゃあ、あいつとディートの関係は知ってるか？」

「同じ、同志でした」

驚くべき事実、少し、クーゲルは反応するのが遅れた。

「詳しく、聞かせてくれるか？」

「分かり…ました」

過去を思い出し、レイナは、今にも泣き出しそうな沈痛な面持ちになる。

何かを祈るように、何かを償うように、一時目を閉じる。

「ヴォーグの理想は、我は我が手に託される人々のために身を捧げん、というものでした」

ずっと目を開くと、レイナはその、ひどく澄んだ藍の目で、クーゲルを見つめた。

「あんな、戦場で殺し合いをやってるようなやつがか？」

「そんな風に言わないでください、救おうとしているんです。でも彼は、自らが救おうとしたもののほど、時の定めのように、その手から零れ落ちてしまふんです。たとえ、ほかの誰かを殺めてでも」

「確かに、そうだな、あいつはそういう力の持ち主だ」

ヴォーグが、死をもたらすと忌み嫌われる墮血者であることをクーゲルはうすうすと感じていた。

「そしてディートは、ヴォーグの手から零れ落つる者を受け止めることの出来る人でした。いえ、それ以上に、その呪縛から解き放とうとしていました。彼の理想は、平和な世界、誰もが出合える世に

しようというものでしたから」

髪をかきあげると、何もかもを諦めたかのような嘲笑がかすかにも
れた。

「もう少しでした。あと少しで、その理想は実現するかもしれない
ったんです」

「だが、結局は変わらなかった、どちらかといえばさらに悪くなっ
てるな」

今の状況を皮肉げに言われる。

さらに彼女の表情は暗くなる。

「無理だったんでしょか。理想も、あの人たちのそばにいること
も：私さえいなければ：」

本当にいやな顔をして、本当にいやなことを言ってきた。

少し、殴ってやろうかと、身構えたが、それもやめた。

自分が生きる意味を無くした、絶望を通り越した表情だった。それ
が、彼女の今の、本来の表情。

クーゲルは、自分の前でそんな顔をしてほしくないと思った。

そのため、話題を変える、というより進ませようと考えた。

「昔のことなんてわからねえよ。簡単に自分のこと否定してんじや
ねえ。んで、話を進めたいんだが、そんなやつが何で世界征服みた
いな馬鹿なこと企んでやがんだ？」

「すいません、少し話がそれましたね。彼は、独りで歩んでいます。
誰も望まない、命あらぬ理想の道を。孤独を無くそうと、孤独を歩
んでいます」

いろいろと、めんどくさい関係の三人のようだ。

「命あらぬ理想か……。そんなものは、確かに、望まないな、そ
んなもので、孤独は無くせるのか？」

少しレイナが考え込む、

「魂がめぐり合うとも、言っていました。意味は、よくわかりませ
ん。でも、それが、今のディートの理想なんだと思います」

「敵の事情はわかった。もう一つ気になんのが、ヴォーグのほうな

んだが。ディートは殺さない、止めるとかなんとかいってたが、やっぱ、親友だからか？」

今までの話で、大体の事情をクーゲルは理解したが、念のためということで、聞いていた。

「彼はディートに言われたんです、もし、自分が道を違えそうになったら、そのときはヴォーグが道を指し示してくれ、と。だから、止めようとしています、理想を、本当に実現するために」

どうしようもなく互いを信頼した約束だった、どちらかが間違えれば、相手がそれを命を賭してでも正す、いわれたほうはそれを認めて素直に従う、ただの友情だけでは、簡単に出来るものではなかった。

「でも、それはもう、無理なんじゃねえのか？ あいつは、まだ一回しかあったことはないが、止められない気がするぜ？」

その約束を裏切ったディートに対し腹立たしげに思う、だが、いまだ決意の固まらない、ヴォーグに対しても怒りを感じる。そのあざけりに対しレイナが怒りと悲しみを帯びた声で、

「なら、あなたには出来るんですか！？ 大切な人の意志を貫いて、願うのは一緒にいることなのに、ほかに守る者もないのに、ただその人のために、その人を殺すなんてことを……」

一番大切な友が、自分の討つべき人。世界と天秤をかけたら、傾くのはその人のほう。

そんな人間を、果たして、自分は殺せるのか、しばらくクーゲルは悩んだ。

「……確かに、つらいな。矛盾ばかりだからな。だけど俺だったら、ディートを殺す、躊躇いはするが、それでも殺す。友が最大の罪を犯そうとするなら、それを止めるためにだ。」

その人を思い、その人の生に固執し、過ちを犯させるのか、その人を思い、過ちを犯す前に、殺して止めるかの違いだった。

そして、ディートは、後者を望んでいるかもしれない、とクーゲルは思った。

「お前を守るためにも、ヴォーグはディートを殺すんじゃないのか？　だから、結局そんなこと言っときながら、するんだろうよ」

ヴォーグの守りたい者、それは、目の前にいる彼女のような気がする。かつてから同志であるのならそうだろう。相手に伝えず、むしろ隠しているが、二人は思いつているようにクーゲルは感じ取っていた。

「彼には、ディートしかいません。私では、その役目は、果たせませんから…」

だがいきなり、ヴォーグが守りたいはずの本人から、それをやや意味がわからない理由で否定する。

「…果たせない？　どういう意味だ？」

「私からはそのことはいえませんが、言いたく…ありません」

クーゲルが聞き返したが、ずっとクーゲルに向けられていた視線が、地面にそらされた。

話しかける言葉がなくなる。無理やりにでも聞いてもよかったが、彼女の雰囲気、話すことが出来なくなった。

レイナは話の間、ずっと暗い表情でいた、過去も、ディートも、ヴォーグも、全てが不幸なことだったかのよう。

クーゲルは、きれいな女性が、そんな顔をするのは嫌いだった。そしてまた、暗い表情から、あの、周りを不安にさせない為の作られた笑顔に変わった。なぜか、その顔のほうが、今はクーゲルの目には悲しく映った。

そんな顔を見るのももちろんいやだった。だが、自分ではちゃんとした笑顔を生み出すには力不足だった。あまりにも彼女のことを知らない、クーゲルは感じた。

「すいません、それだけは言えないんです。クーゲルさんも気がついたことだし、みんなにそのことを伝えて、もうそろそろ、私も休憩しますね。後、次の命令が伝えられました。ここから東の、砦都バレイルに向かい、その地の守護だそうです」

話題をそらし、この場から離れようとレイナはした。

「バレイルかあ…。久しぶりだな」

クーゲルも、食い下がるようなことはせず、その話題に関心をむける。

「昔、訪れたことがあるんですか？」

「そこは、俺の、故郷だからな。…やっぱり、あそこも巻き込まれちまったか。ぜってえあの野郎、叩き潰してやる！」

「そう：ですね、頑張ってください。でも今は、十分に、体を休めてください」

そういつて、彼女は部屋から出て行った。

クーゲルも、横になって考え事をしていたが、やがてまどろんでいき、眠りについた。

第四章 第一話

鉛色の低い雲が流れていた。吹き続けている強い風は、冷たい。目の前には砦都バレイルの荘厳ともいえる城壁がそびえていた。

その聖都の次に堅固といわれる都は、左右にある山を覆ってしまうかと思うほどの巨大さを誇っている。

さらに中にも一回りの城壁が立てられ、手前には堀が渡されている。かたくなに敵の侵入を拒むものだったが、正面に見えている南門の橋は、吊っている鎖が断ち切れ降りたままになっており、門も破壊されてしまっている。

結局、またヴォーグたちは後手に回ってしまった。

外と内の城壁の間では、今も激しい戦いが繰り広げられていた。後手に回っていたとしても、まだ間に合う状況だ。

「一気に門を通り抜け、バレイルの部隊に合流する」

一番体力のないレイナに合わせて駆け出す。

「じゃ、ぼくが道を開くよ」

言って、クーガが先頭に踊り出る、ここで本当に踊りながら出てくるなら、それは遊んでいるのか狂っているかだろう。

「あれで、大丈夫なのか？」

クーゲルが不安をもらす。

なぜなら、クーガが、それはもう誰が見ても間違いなく踊っていると答えるほど完璧に、軽快なリズムに乗っている。

ヴォーグらの不安をよそに、クーガは腰から銀色の何かを複数取り出した。

少年はそれを一瞬にして組み上げ、何かの武器の形にするが、もうく、二、三度振るえば崩れてしまいそうだった。

「ホイ！……仕上げっ！」

一気に完成した武器が法力を示す白い光に包まれると、パーツ同士が、溶け合い、接着し、法力が大きくなるほど、そのつながりは強

靱なものになり、一つの頑強な武器に変じた。

それを右手の持つ。

銀色の何か、聖銀と呼ばれる、法力に浸され硬度を増した銀で出来たその武器は、カタールという武器の形状と似通っていた。持ち手の両端から、二本の支柱が腕を沿うように伸び、腕の延長線上に刃がある。が、その刃は横ではなく縦に付き、さらに手の甲から肘に掛けてもう一つ刃が伸びている。

右足でリズムを刻み、呼吸を合わせて飛び上がる。

「イイヤッハァ♪」

飛び上がりながら、二人の首に突きを放ち、落下と同時に脳天に刃を叩き落す。

その動きに、クーゲルらの不安は一気に消し飛んだ。

ただ、綺麗であった。クーガの戦い方は、強弱の分別の域を超え、綺麗で美しい。

舞うように戦う、否、完成された舞踊を踊っていた。

隙が無く、さらに正確に急所を突く。何よりも、何事の追従も許さないような素早さを持っている。

そしてそのまま、アップテンポの曲を踊るように、リズムカルに、直線的な動きで敵を倒していく。

「フッ!! ……よい……しょっと!」

鳩尾に刃を突き、正面へのけん制のために突き刺した敵の体を正面へ蹴り飛ばし、さらに背後から迫った敵に振り向き様に肘打ちをして、喉に刃を突き刺す。

格闘術の延長線上に置いたようなその剣術は、斬ることよりも突くことを重視した武器と非常に相性がよかった。

「まだまだ! もっと、速くなるよ!」

右の肩が蒼く輝き、クーガの周囲に烈風が渦巻く。

痕章『風を生む者』によって、クーガは風を使役していた。

小さく飛び上がりつつ、その渦巻く大気を右足の裏で圧縮する。

体を横に倒し、全身をばねのように使い蹴りだしながら、同時に真

後ろにその圧縮した空気を噴射し、驚異的な加速を得る。空中で四人の急所を貫いていき、さらに着地際、砂を周囲に撒き散らし、敵の視界を奪う。

右手を首に巻きつけるようにし、さらに左手を脇から掌打の形で突き出す。左肩が服越しに蒼く光りだす。

「……ほう、すごいな」

左右の肩が輝いたことにヴォーグが感心する。

二つの痕章を刻み込むことは、同時に多大な危険が生じ、ほとんどの人間が行うことが出来ない所業で、自分以外にはいないのではとヴォーグは考えていた程のことだからだ。

「こいつでも……喰らっつけ♪」

左手の前の空間が歪むように膨張し、劫火球が噴き出した。その炎は正面を一気に焼き尽くし、その灼熱は、鉄をも溶かすほど。全てが消え去り、そこに残るものは、ただ陽炎のみ。

左肩の痕章は、魔力から火炎を作り出し、法力を用いてそれを操る代物だった。普通は暖炉に使われるような一般的な痕章『火を生む者』だったが、より複雑に、より深く刻み込まれたそれを極め、常軌を逸する破壊力をクーガは生み出していた。

次々とクーガが屍を作り、それを踏み越え、内門の前の騎士団の長とおもわしき人物が率いる部隊と合流する。

「我が部隊、聖王の命により、バレイルに助勢する」

反撃ののろしとなるヴォーグの声が、戦乱の中を駆けた。

第四章 第二話

ヴォーグの増援の声に反応して、団長が振り向く。ヴォーグらとほとんど歳に変わりはないだろう、精悍さが溢れ、金の目に光る眼光は鋭い。

「戦況はどうなっている？」

「聖王の命！？ 応援が来てくれましたか！ 私は団長のヴィレン・イシュトです。貴方、名はなんと？」

「戦魂騎士団のヴォーグ。後は俺の従士、聖騎士団二名、戦魂がもう一人だ」

そこに、伝令役の兵が駆け寄り、何かを伝えた。団長の顔が翳る。

「戦魂騎士団ですか。心強い。しかし、それだけ、ですか？ ほかには？ 今は人数でもこちらが押されているんですよ！？ それに、今しがた、北の外門が落ちました。かなり、まずいことになっています」

「俺たちだけで、充分だ。それに兵は、お前たちがいる」

ヴォーグの自信を持った声音に、ヴィレンも不安が薄れる。

「はい。わかりました、これからの兵の統率は貴方に一任します」

「わかった。それでは、負傷者と、レイナ……俺の従士を門の中に入れたら、橋を上げろ。守りに回っているのは身動きが取れない」

「ですがそれでは、ここに残っている兵は？」

「大丈夫だ、見捨てるわけじゃない。……聞け！ バレイルの兵たちよ！」

戦場でもよく通る声で、声を張り上げる。唐突のことにヴィレンが驚き耳を塞ぐ。

「今から橋を上げる！ だがここににいる者も生き残れ！ 生きることを最優先しろ。戦うのはその後で良い！ 街にいる側も、同胞を守りたかったら必死に援護しろ！ 俺たちが、全てを潰す。我等が手で勝利をつかむ！ そして……生きて杯を交わせ！」

『……オオーッ!!』

バレイルの兵が一丸となる。はるか遠く、城壁や街を隔てた北側にまで伝播していく。空気が変わり、こちら側が圧倒的なのではないかと感じるほどだ。たったこれだけで、ここまで士気を上げることが出来るのかと、団長ヴィレンは驚嘆する。

「ヴィレン、兵を率いて北を経由して東側に固まれ。味方にその背を預けろ」

「あなたたちだけで戦うおつもりですか!？」

それは、普通の人間には考えられないことだった。たった四人で、一つの都を滅ぼそうとする軍勢に立ち向かうことなど。それは、一人が一個大隊にも匹敵する働きをするということに他ならないからだ。

「そうだ。心配するな、もし俺たちが倒れたら、お前たちが戦え。衰えた敵を潰すのはたやすい」

自分の命など顧みない発言。だが、死ぬことはありえないという、気迫と自信に満ちていた。

「わかりました」

「それと、俺の合図と同時に、全員、中に戻れ」

「わかり……はい? 引き上げる? なぜです?」

命令の意味がわからないといった抗議の声を上げる。

「やつらは、ディートの軍は、二度立ち上がる。聖王軍側が大敗を喫している理由だ。……そろそろ時間がない、とにかく、合図をしたら引き上げろ、太刀打ちできない。後のことは、俺たちに任せろ」戦況は、刻一刻と変化している。説明の時間までは取ることが出来なかった。

「了解しました! 無事を願います!」

敬礼をして、馬に跨り駆けていった。

「無事で、いてくださいね?」

レイナが負傷した兵を引き連れた一団と門の方へ駆けていく。その最中も負傷者に気を使い、自らの心配はしない。

「クーガ、お前は北に回れ、その足で、敵が大量になだれ込む前に、片付けに行ってくれ。出来るか？」

「モチッ！」

ピョンと飛び跳ねながら、勢いよく返事を返す。

「ではアーリアは西側を頼む。南側は一番敵の量が多い。俺は城壁の中を、クーゲルは外側を潰してくれ。頼んだ」

だんだんとヴォーグは体の内側の籐をはずしていく。戦うものへと、人ならざるものへと変わっていく。

ヴォーグの、外見は変わることはない、だが、それを包む雰囲気、研ぎ澄まされていく。

「わかった」

「てめえに言われなくてもそうしてらあ」

「では……行くぞ」

完全に力を解放した。ヴォーグの左腕の死痕が、金属を透過して籐手越しに蒼い光を淡く輝かせる。

ヴォーグは、その意識に飲み込まれないように注意しながらも、殺すことへと意識を集中していく。

だんだんと、クーガの顔が恐怖に染まっていく。

「……うッ………あっっ!!」

突然、クーガから刃が振るわれる。左手の籐手でヴォーグは受け止めると、クーガが途端に手を引っ込めた。

「やはり、お前は勘がいいな……。大丈夫か？」

質問に対し、クーガの動きが少しの間止まる。ヴォーグの言葉に、絶望の色を感じたから。

「ん……いや、ごめんね！ そっちこそ大丈夫？」

クーガは、恐怖していた。ヴォーグから滲み出した、殺意よりも、もっと黒く堕ちた、あえていうなれば死気のような物を感じ取っていた。

そして、本能的に、死から逃れるために刃を振るっていた。

だが、ヴォーグの体に刃が触れた途端、より濃縮された、死、その

物が、五感へ流れ出してきた気がして、クーガはさらに戦慄していた。

「ああ、大丈夫だ」

「ん、じゃあ、行ってくる！」

逃げるようにしてクーガが駆け出す。その後を追うようにアーリアも駆け出した。

「てめえ、気味悪いぜ、なんだよその魔力の量は？　化け物か？」
ヴォーグの魔力の量は、数多の戦場を駆けたクーゲルでさえも、そう言わしめるほどだった。

ぴりぴりとした感覚が空間に広がり、空間がまるで黒く沈んでいくかのような錯覚を覚える。

飄々とした感じで皮肉をクーゲルが言う。

「ああ、そんなものだ、あまり近づくな。魔力に吞まれる」
敵勢をみつめながら、無愛想にヴォーグは返事をする。

「吞まれる？　どういう意味だ？」

どうやらクーゲルは魔力の力をあまり知りえていない。何よりもその力を人が経験することが稀で、ほとんどの書物には書かれてはいない恐ろしさだった。

だが彼は、無知が故に愚かに恐怖を抱かないのではなく、自らの力に自信を持ち、ヴォーグに負けはしないという挑発じみた態度だった。それが虚勢ではなく、実力も備わっていることが、ヴォーグには心強く感じた。

「聞いておけ。早く行け」

「わあったよ。んじゃ、行ってくるわ」

走り出しながら、右肩に手を当て、そこを中心に蒼い光がほとばしると、黒き鋼を右腕に紡いでいった。

それは大気中の法力と魔力を複雑にまぜ、鋼を作り出す技術だった。その技術は、銀翼天使の修行でも身につくもので、黒き鋼は普通の金属とは比べ物にならない強度を持つ。

まるで霧のような黒い粒子がクーゲルの腕に集結していく。

その形状をヴォーグが把握できないまま、回りを蹴散らしながらクーゲルは敵の中に消えていった。

バレイルの兵が去っていき、こちらに向かって敵兵が進軍を開始し始めた。

「敵よ……聞け！」

一斉に注意がヴォーグに向き、歩が緩む。

「この戦いが終わったとき、争いのない世が来たとき、お前たちは、戦うことをやめることが出来るか！ 剣を捨てることが出来るか！」
ヴォーグの放った問いから、少し間を置いて、敵の武官らしき人物が戦列の前に出た。

「何を戯言を！ 我等は戦いが終わろうとも剣を持ち続ける。支配するためには、力が必要だ、そして我等は上に立つ」

なぜ、ここまですんなりと、最悪の答えを出すのかと、ヴォーグは惘然としていた。

今もこうして、争いが消えなかったことが、無念だった。

やがて、争いを消そうと、決意を固める。

「それでは、争いは、消えない……」

独り言のように、小さくつぶやく。

「その命を……斬る。その堕ちた思いは俺が背負う、魂は天へ上れ！」

左腕の死痕を刻まれた下腕部が、力を発揮するために内側から張り裂けるような鋭い痛みを放つ。その原因を内に納め続けて自我が狂いそうになるよりはまだましだと思え、やはり、自分は戦うことしか出来ない物だともヴォーグは思っていた。

小刻みに震える左手を、握り締める。籠手の内側から、黒い血が零れ落ちた。

そして、ヴォーグは、目の前にあるもの総てを殺す、剣となった。漲る殺氣に一瞬たじろき、完全に敵の前進が止まるが、やがて恐怖に駆られたように、波となって、押し寄せてきた。

それに対し、ヴォーグも構えを取る。ディートによって仕込まれた

剣術の構え。

大きめに足を開いた体の左側面を正面とし、左肘を顔の前に突き出し、それ越しに敵を見やる。片手で握られた大剣は、後ろ下段に回し、地に着かないように握りこんで少し浮かせた。

「フッ……！」

正面から敵の集団にかち合うとともに、右足で踏み込みながら、片手のみで剣を振り下ろす。

予想外の間合いから振り下ろされた剣に、二人の兵が一気に巻き込まれ、鎧の材質を無視して両断される。

そこから右へ足を運びながら側面を切り上げる。さらに振り返りながら打ち下ろしの斬撃を背後に加えた。盾や剣を構えて防ごうとするが、それさえも無視して、刃はすり抜けるように貫通していく。その刃に収束された膨大な量の魔力は、剣閃に紫紺の軌跡を輝かせた。

その輝きは、戦場の中においても、禍々しい異彩を放っていた。

総て、何の抵抗も無く、一刀で葬っていく。

それがヴォーグの左腕に刻まれた死痕、『刃を閃く者』の力、空間を絶ち斬り、消失させる力だった。

空間そのものを魔力で斬るが如く消失させるため、全てを両断し、防ぐものは無いに等しい。

軌跡が敵陣の中で弧を描くたび、屍は増えていく。

「ば……化けモツ……!!？」

言い終える前に刃を振るう。聴きたくはない言葉を耳にして、思わず立ち止まっていた。

その一瞬、背後に気配を感じ、避けられないと判断し、大きく前に出る。

背中を大きく横に切られる、致命傷ではない。もし、横に飛んでいたのなら、ヴォーグの胴は二つに分かれていただろう。

なぜ、止まっていた？

ヴォーグは、心の内で自問した。

壊すことしか、殺すことしか出来ない化け物なんて、ずっと前からわかっていたはずだ。

この力は、ディートに与えられた。総てを、破壊するためだけの、壊すことしか出来ない俺には、お似合いの、力。

……そうか、ディートか。あいつが、率いた兵だから、それが今のディートの意志だと感じて、悲しくなっていたのか。

ディート、今は、俺のことを、本心からそう考えているのか？ 死と血しか生み出さない？

答えるものがない問いを心の中でつぶやく。

いや、彼は、答えている、血塗られた手、と。彼は、自分に嘘はつかなかった、きっと今でも。だから、それは、本当に彼の意思だと、ヴォーグは考えた。

なぜか、その事実を冷静にみつめている自分がいた。

そして、感情に飲まれずに、冷静な面で、理性的に、殺戮衝動が働いていく。

殺すことが、俺に出来る最大の救いならば、殺す、殺そう、殺したい。

生きているから、総て、敵だ。

与えよう、唯一であり、最大の、救いを。

第四章 第三話

クーガは、アーリアがぎりぎり視認出来る位置に陣取って、戦闘を繰り返していた。

とは言うものの、普通の人間ではどれが誰か区別がつかないほどに離れている、そんな中で完全に動きが見えているのは、尋常ならざる訓練を受けた身であるクーガだからである。

その瞳は、いつもの幼少さは無く、ただ狩をする猛禽の鋭さを持っていた。ただ、その目は、敵ではなく、アーリアに注がれているが。やっぱり、つよいなく。でも、あの強さは、ダメだ。

アーリアの、緻密に計算された手本以上の完璧さのある身のこなしを、ずっとクーガは眺めていた。

素手で戦っているアーリアを眺め続ける。武器を持ったかなりの数の敵を、一撃ももらわずに戦っている。

門外不出の格闘術とでも言うのだろうか、世界のさまざまな技、を見てきた彼が一度も見なかったことのない独特の操術で体を動かしていた。その動きはまったく無駄がなく、最短距離で命を狙うそれは、暗殺術の類に近い。

戦いながら、クーガの意識は全てアーリアの戦闘に向いていた。

クーガは、無意識に、体だけが反応して戦い、人を、殺し続けている。

振り下ろされた剣を避けざま、がら空きになったわき腹に刃を滑り込ませる、その動作さえ、一度たりとも敵に目を向けていない。

アーリアは敵の動きを完全に見極め、的確に紙一重でかわしながら、銀翼十字の医療技術である、法力で体内の骨などを動かし、体を切り開かずには治療を行なう、という技術を、戦闘用に自己流で応用した、標的の内側から崩壊を起こす拳打を、急所に叩き込んでいた。アーリアが敵の喉下に手刀を突き入れると、突かれた首は、奇妙に

内側からひしゃげ、首であった物を口から吐き出しながら敵は崩れ落ちる。

続く左側面からの攻撃を、腕で払いのけつつ回身して避ける。

攻撃を避けられ、屍に足を取られ倒れた相手の顔面を何の躊躇も示さずアーリアは踏みつけた。頭蓋骨が砕け、脳漿が周りにぶちまけられた。

彼女は、完璧だった。その軌道は、どんなに精緻な道具を用いるよりも、完璧な図形を現しているかのようだ。

それは、美しく、儚く、人を、失っていた。

クーガは考える、強くなるには、二つの方法があった。総てを手に入れようとする方法と、総てを捨てる方法。

何も得ようとはせず、何も持っているものも無く、ただ、捨てるだけ。

アーリアは、後者だろうとクーガは判断する。彼女は、総てを失った。感情さえも、完全に失っている。押し殺しているのではない、最初から、存在していない。

そんなのは、かわいそうだ。何とか、してやりたい。どうにかして、感情というものを、人というものを知ってほしいとも、クーゲルは考えた。

意識をアーリアに集中しすぎて、人ならざるものに振るわれた剣に、クーガは反応できず、左鎖骨あたりを薄く斬られた。

それで、ようやく自分が戦っていることを思い出す。

腹も減っている気がする。

クーガは自分の損傷を確認する。クーガや他の仲間も着ている、多少の斬撃では分散された衝撃が届くだけの、防刃の痕章が編み込まれた衣の間の縫うように放たれていた。

再びクーガを傷つけた刃が振り下ろされる。だが、こもる闘気は、ないに等しい。

それは、人を振るう刃といわれる剣の放ったもの。

所持している者の法力を吸い取り、いわれ通り剣が人に自らを振る

わせる剣。

刃は法力により研ぎ澄まされ、ある程度の素質があるものなら、持っているだけでいいという、厄介な武器だった。

周りを見渡すと、痕章が刻まれた剣を持つのは八人。

「そろそろ、飛ばすかな♪」

ふっと、状態をかがませる。脱力したかのような、腕を下にたらし
た姿勢になる。

三人が包囲し、その一人から狙い済まして脳天に痕章の剣が振り下
ろされる。

「行くよ……」

クーガの声は、低く鋭く、意識とともに研ぎ澄まされる、そして、
クーガの頭が叩き割られたと思われた瞬間。

風が、薙ぎ払われた。ほぼ同時に解き放たれた九つの斬撃は、のど、
心臓、鳩尾を確実に射貫いていた。さらに、武器を振り下ろしてい
た兵を殺したのは三番目。

血を噴出す間もなく、三人の間隙を縫うように風が疾る。

奥にいる兵に、滑り込むようにして足払いを決める。

足を払われたことに遅れて反応し、倒れ込みつつも振るわれた敵の
一撃を弾き返すと、踵を振り下ろして頭を潰す。鼻が顔面にめり込
み、即死した。

さらに、軸足を狙って放たれた後ろからの横薙ぎを地に刃を突き刺
して防ぎ、それを支えに跳躍、敵の頭上を越え、背後に着地しなが
ら敵の体を二つに割る。

ようやく最初の三人が倒れる。

状況をわかっているのは、クーガと、剣だけのようだった。ほかの
兵の顔には、焦りと畏怖が貼り付けられていた。

膠着している隙に、クーガは周りをもう一度よく見渡した。目に映
るのは、いつの間にか自分が倒していた大量の骸ばかりだった。

腹が……減った。

残りは三人と、一握りの兵だけ、どうやらもう増援もないようだっ

た。

剣を持った三人が同時に飛び掛ってくる。相打ちを躊躇しない鋭い踏み込みから振るわれる三筋の剣閃は、一発で致命傷になりかねない。剣もクーガの技量を測ったか、間合いを殺すほど踏み込んだ。た。

それに対しクーガは、さらに間合いをつめた。

一人の敵の体に剣が震えぬほど密着することにより、剣の間合いの内の外に入り、肘でわき腹に小さな隙間を作り、そこに武器を殴り入れる。

致命傷を与えたそれを一つの刃の盾にする。首が飛び、大量の血が吹き出た。もう一つの斬撃を避けながら、血しぶきに一瞬視界を奪われた兵の鳩尾に刃を突きこむ。

さらに手の中に炎を作り出し、放つ。痕章の刻まれた剣を持った兵が火達磨になり、剣をむちゃくちゃに振り回しながら焼けていった。

「な、なんだよ、アレ……なんであんなに強いんだよ!？」

敵はその強さを目の当たりにし、完全に戦闘意欲を失っていた。

「おい、見……てみる、あの髪、赤銅色だぞ……もしかして」

ぎりぎりの精神状態の中で、敵の一人が一つの特徴を見つけてしまった。気づかなければよかった、絶望の特徴を。

「まさか!?! そんな、ここんなどところに、ファークニルなんて、いるわけ……」

その名を口にした瞬間、クーガの口が笑みに変わった。いつもの無邪気の中に、膨大な狂気を抱えた笑顔だった。

「今頃気づいたの? その通り、ファークニルは僕の呼ばれ名だ」
小柄な体躯に赤銅色の髪、その特徴を持つ戦士は、戦場に静寂をもたらす者として、龍のごとき強さと赤銅の髪から、赤龍、ファークニルといわれ恐れられていた。

「おい、逃げるぞ! 勝てるわけ無い!!」

恐怖に体が動かなくなりそうになりながら、何とか後ろへ足を引いて、いまや恐怖しか感じないファークニルから距離をとっていく。

その間、クーガは動かない。

やがて、走れるまでに恐怖から離れたところで、敵たちはいつせいに後ろを向いて逃げ出した。

それをみて、笑顔を崩していなかった表情が、更に歪む。みるものを総毛立たせる笑顔を、クーガは見せた。ただ、その目には、まだ稚気とした輝きを宿らせたままで、いっそう恐怖を倍化させた。

「そろそろ……狩ろうか」

そこでクーガは動く。追いかけるように体制を整える。

しっかりと武器を握り込むと、手のひらにぬめる感触がして、手のひらを開いてみつめた。

べつとりと、血に濡れていた。大量の血で、つくはざがないところまで血がついていた。よく見ると全身に血と、誰とも知れない肉片がついていた。まるで死体をかき混ぜた池の中に浸かっていたかのように。

「はあ……腹減ったなあ……」

とにかく、腹の音がクーガは気になっていた。

第四章 第四話

彼女は、助けようとしていた。

幾千もの人、戦場で戦う人々を。

だから、彼女は――

城壁の中、救護舎も戦場と化していた。

負傷者の数はキリが無く、さらに増えていくばかりだった。

直す側の要である、法力による人体生成、修復が出来る十字の修道士は、その数に比べ、圧倒的に少ない状況だ。

元より、素質が必要なその能力を十分に発揮できるものはさらに少なく、十字史上一とまで言われる癒しの持ち主であるレイナが重傷者の全てを引き受けていた。

一人の負傷者の傷をあらかた癒し、残りの小さな傷を過程途中の修道女二人に預ける。

「もうあなたたちで癒せる範囲です。後は頼みました」

「そんな……私たちじゃ……」

自信無さげに俯く。実際のところ、十分に癒せる範囲だが、経験がまだ不足しているせいで、自分を低く見ているようだった。

レイナはそれを見ると、自らの法力を制御して、ある力に流れを変える。

その法力を放ちながら、二人を抱き寄せる。

「大丈夫、まだ傷ついていないあなたたちなら出来ます……」

「え……はい。がんばります！」

自信がわき、表情から不安が消える。それを見て彼女は安心した表情を見せるが、心では自らに嫌悪していた。

自分は……卑怯な人間だ。

法力をこんな風に操って、人の心を縛るなんて。

罪悪感を抱きつつ、次の負傷者の場所へ向かう。怪我人一人に最後まで付き添えないことも、彼女のそれを大きくしていた。

突然に、一人の兵が通路をあせった表情で駆けてきた。

「なあ、一人まずいやつがいるんだ。何とかしてくれねえか!？」

「はい。わかりました。それより、まずはあなたの傷を癒します」
小さな傷が三箇所ほどあることを、彼女はすばやく見つけた。

「これぐらいほかに見てもらえば、それより……。」

「放っておくのはよくないです。それに、この程度なら、一瞬で……」

傷口に手を当て、ほんの少しすると、それだけで、傷が癒えてしまった。同じようにほかも癒す。

彼女の多大な、癒すための法力は、ふれるだけ、つまりは溢れ出る力だけでも、傷が癒えていった。

「それでは、案内してください」

兵はうなずいて、元来た道のほうへ、歩いていく。

後ろについていくと、確かにひどい状態の兵が一人寝かされていた。今も生きているのが不思議というほどだ。

先輩に当たる年の修道士が癒そうとしていたが、痛み止めと止血で手一杯のようだった。

「私がやります」

振り向いた修道士の顔には疲労感と諦めが漂っていた。修道士と入れ替わるようにレイナが負傷者の前に着く。

「一つ聞きます。……あなたは、生を望みますか? ……それともここで死を選びますか?」

彼女の一言にまわりは騒然となり、しんと静まり返った。

敵味方関係なく、全てのものに救いの手を差し伸べることが信念のはずの、十字の修道士、それともかなり高位の称号を授かっている彼女が言うような台詞ではないからだ。

だが、彼女はまったく周りを意識していなかった。
ただ醒めきった冷淡な表情で負傷者をみつめている。
兵は、かすかにうなずいた。

「生きて再び、戦うのですね？」

もうほとんど動いていなかったが、彼女は癒すことを決めた。
彼女の帯びる空気の質が変わる。

「急ぐ必要があります！ 水と包帯、とにかく直すのに必要なものを！」

体中を探り、傷の箇所を確かめる。

どうやら致命的な重症は三つ。

腕の裂傷とわき腹辺りの刺傷、それにおそらく胸骨の骨折。

血も流れすぎている、全身の血の気が悪い。

胸に手を当て異常を調べる。やはり、あばらが折れて肺に突き刺さってしまっていた。

まず、レイナは腕と腹の傷に胸の治療をしてる間のためだけの止血をした。

胸に両手を重ねて置き、そこに神経を集中する。

そして、内側から法力で力を加え、骨を動かしていく。

出来るだけ周囲を傷つけないよう、レイナは力を慎重に制御して、元の位置まで戻す。

さらに力を加え、折れてしまっていた骨を、再びつなげていく。

「ナイフを……」

レイナは針のようなナイフを受けとると、太い血管を傷つけないように慎重に狙いを定めて傷の箇所まで突き通す。

ナイフを抜くと見る間に中にたまっていた血があふれ出した。さらにそれを押し出すように、再び彼女は体の中から再生を行っていた。

次に腹部の傷の治療にレイナは取り掛かる、その傷は体を完全に貫通し、決るような刺突に内蔵もぐちゃぐちゃにされてしまっていた。
「すいません。私の代わりに誰か痛み止めと止血を」

先ほどまで看病に当たっていた修道士が傍らにつく。

「私は腹部の傷を治します。なので、こことこの止血を」

指示を送った後、傷に触れた。生暖かい血で指がぬめる。レイナはそのまま中へ滑り込ませる。

腹の傷に手を差し込むようにして、中から直接内臓の治療を行う。

内臓の修復はほかの部分より複雑なため、より多くの力を使う。そのため彼女でもかなりの時間と体力を消費してしまう。

異常な量の放出に、レイナの足元がぐらりと揺れた。

「大丈夫ですか！？　やはりこの方を癒すことはもう無理……」

「癒すんです！　戦場には、生きようとしても生きられない人、死にたくなくても死んでしまう人ばかりなんです。その中でこの方は生きるといういました、まだ生きています。だから私たちは、この命を救わなくてはならないんです」

切実な彼女の言葉に、周りは何も言えなくなった。

自らの力の量など気にせずに一心に癒し続け、一介の修道士ではなしえないような傷の修復を、恐ろしいほどの速さで遂げていた。

荒く息が上がってしまったが、レイナはそれを耐えて、すぐさま腕の傷を治しに掛かった。

一番直しやすい傷だったが、法力が少ないために時間が掛かかる。だが、なんとか癒す。

総ての傷を癒したが、治療の時間の間に更に血の気が薄くなっていた。いまだ乱れた弱い呼吸も回復しない。

失血死、それは彼女たち十字の者が直面する一番の問題だった。

いくら、傷が癒せたとしても、血が足りなくてはやはり人は死んでしまう、そして戦場ではそれが多かった。

レイナは、左手で、自分の心臓の上辺りの胸に触れ、兵の胸に右手を乗せた。

そして、長い間、目を閉じていた。

法力は流れ、次第に兵の血色はよくなっていた。

それは、彼女が最高といわれる理由の、一つだった。通常、人は体

を癒すことは出来ても、血液を作り出すことは出来ないのだが、彼女は、十字の中でただひとり、まれに見る特異な力として、その術を使役していた。

法力と、自分自身の活力や血液を大量に失うことになるが、それで人を救うことが出来た。

疲れきった中で、晴れ晴れとした微笑みを彼女は浮かべた。

それはとても綺麗で、それは彼女の、本来の笑顔。

だがそれは儚く散る。戦場という、死の風によって。

周りから賞賛を受ける中、唐突に何かに押されて状態がぐらりと揺れる。倒れそうになるのを何とか踏みとどまり、レイナは足元を見る。

その何かは、涙で顔をくしゃくしゃにしてすがり付いてきた。一人の兵だった。

「なあ、なあ!! 助けてくれないか……俺の友を。あいつは、俺をかばって……この戦場から帰ったら……一体俺はどうしたらいいんだよ、おい! だから助けてくれよ!」

意味の通らない言葉をわめく。

レイナの中に、焦燥感がわく、いやな予感がしていた。

「まずは、落ち着いてください、その人の容態はどうなんです?」

「あいつには、婚約者が待ってるってっ! 帰ったら結婚するって
いていたのに!」

どうやら、かなりのパニック状態のようだ、彼の言動から察しても
よほど重症なのだろう。早く助けなければいけない。

肩をつかんで揺らし、目線を合わせ、少しきつめにしゃべる。

「いいから! 落ち着いて! 今は容態のほうが大事です。その人は
どこにいます! どんな状態ですか!？」

ようやく正気に戻ったか、なくのをやめたが、その表情はひどく暗
い。

「胸に三本の剣が突き立てられた……死んだよ。なあ、助けてくれ
よ……」

レイナの動きが止まる。まるでその言葉を理解できないかのように、拒絶するように。

「そ……それは、私たち……には、どうすることも出来ま……せん。

」
声を震わせながらも、たったそれだけの言葉を、必死につむぎだした。

そう、死は決して癒すことの出来ないものだった。

たとえ、最高といわれようとも、それは、抗えない事実だった。

まるで自らの胸に死が突きたてられたかのように。絶望に打ちひしがれ、死人のように、レイナから表情が消えていた。

何を浮かれていたんだろう。

私では、誰も助けられない。

彼の涙をぬぐうことも、死者の死を癒すことも、帰りを待つ者の悲しみを消すことも、出来ない。

誰も、救うことなんて……出来やしない。

第四章 第五話

彼女は、助けようとしていた。

まだ、彼女が、戦場にたつて間もない頃のことだった。

全ての人を救えると信じて、彼女は癒し続けていた。

その力は強く、兵からも慕われ、彼らが、戦地で死にさえしなれば、自分が必ず救うことが出来ると思っていた。

そのときも、戦で死に掛けた一人の重傷者を、救った。

そう思っていた、救ったはずだった。

だが、その兵は、自殺を、した。

治って、動けるようになった、その時、喉に刃をつきたてた。

彼女の懸命の治療により、戦地に復帰できるほどになったため、だった。

自ら戦地に行くことを拒否し、戦の恐怖が死の恐怖を凌駕し、自害をした。

彼女は、自分のせいとも思った。

死に掛けの兵を、自らが無理やり癒した。戦の恐怖を味あわせながらも、死の淵から無理やり引き戻した。

もしくは、自分が、癒しきれなければ、何か後遺症が残りさえして、戦場に赴くことの出来ない体だったならば、彼は死ななかったかもしれない。レイナの中に後悔ばかりが残った。

そして、戦地で兵が死ぬこと、癒したものが死ぬことは、後がたたなかった。

幾千もの人々を救おうとしたが、彼女は、全ての人々を救うことは出来なかった。

やがて彼女は自らを責め立てるように死を象徴する黒い服ばかりを着るようになった。

レイナは、願った。死に追いやることの無い様、この世から争いが潰えることを。

争いが無ければ、そのような人たちはいなくなると考えた。

願うことしか出来なかった。

その後、彼女は二人の男と出会う。その願いをかなえそうなほどに、強い輝きを持った二人に。

だが、その輝きは、二人が引き裂かれることによって、消えてしまった。

そして、それさえも、彼女は自分のせいだと、後悔した。

あのときの三人はとても心地よかった、みんなで、全てを実現しようとしていた。だけど、自分のせいで、理想が崩れ去った。もしあの二人に私が出会わなければ、理想は叶っていたかもしれない。三人である必要なんて、無かった、あの人たちだけだったなら、よかった。私は、要らない。

彼女は、助けようとしていた。

幾千もの人、戦場で戦う人々を。

だから彼女は、絶望した――

第四章 第六話

門の真下の位置する場所、数十の兵に囲まれる中で、クーゲルは右手を空に掲げる。

「見せてやるよ！　これが俺の……力だあゝ！」

拳の先を覆うほどしかなかった黒き鋼を、再び作り出していく。右腕を中心に大気中の法力と魔力が混ざり合い、黒い鋼が収束していく。再び作り出したそれは、その量が異常だった、よほどの使い手でなければ、短剣が作れて上出来といわれる。

それは見る間に集まり、右腕のみを包む強固な鎧と化した。鎧を纏った右手を握り締めると、手の鎧が今度は赤色に変じた。まるで彼の意思を現しているように、燃えるような真紅の赤に。

「おまえら、ここに立つのなら、死を覚悟しな！」

包囲の最前列にいた数人の兵が一拳にクーゲルに殺到する。

それに対し、クーゲルは右腕を横に勢いよく振りぬいた。すると周りの何も無い空間に、赤い光の点が漂い始める。

同士討ちがないよう、微妙にタイミングをずらしながら兵が迫る。だが、その攻撃が届く前に、クーゲルはもう一度手を振った。

赤い点が目もくらむ様な紅い閃光を周囲に撒き散らす。吹き付ける熱風と衝撃波から、それは爆発だということに周囲にいた者は気づいた。だが、ぽっかりと抜け落ちたように爆音は響いてこない。

点の近くにいた者は、腕や足、はたまた頭が千切れ飛び、地に伏した。

それが能力なのだろう、その死痕は、空間に爆発を起こす力を得る。死の形、つまりは壊れた形のことだった。

避けたりなどして無事だった兵が、もう一度陣形を組みなおす。なにぶんわかりやすい能力故、同じ手は通じないだろう。敵も慎重に赤い点を探る。

見極めたか、先ほどと同じように、だが数は倍に増え、飛び掛って

いった。

それと同時にクーゲルも大きく一步を踏み込む。周囲の追隨を許さない一点突破。

正面からの初撃を左の手甲で弾き、相手は大きくよろめいて後ろの赤い光に触れ爆死する。

もう一つの正面からの攻撃に、その右腕でカウンターをあわせる。

その拳が敵の顔面に触れた瞬間、紅い閃光がほとばしり、その頭は赤い破片に変じた。そして頭のなくなった死体はどうと崩れ落ちる。かろうじて追いつき、一撃を見舞おうとした敵兵の振り下ろされる剣よりも速く、その胴体をけりつけ、前に進むための反動に利用する。

包囲を抜けても、まだクーゲルの猛進は止まらない。

クーゲルは、後ろを振り返りもせず、一直線に指揮官のいる本陣まで突撃していた。

もちろん、敵もこの進撃を止めようと、陣を組む。

「てめえら邪魔だ！　どきやがれ！！」

鎧の右腕を大きく振り下ろす。目の前一直線にすさまじい爆発が発生し、一瞬で陣が吹き飛ぶ。

爆発自体は、やはり抜け落ちたように音が発生しなかった。

そしてそれは、爆発の、音というエネルギーがまったく無いことを意味していた。いや、正確に言えば、爆発により生じる音までも、破壊のエネルギーへと変換していた。

前進は止まらず、残った兵を蹴散らしながら、指揮官の下までたどり着く。

指揮官は最後の足掻きをしようと剣を抜こうとするが、抜き終える前に、クーゲルはのどを鷲づかみにして、そのまま握り潰した。

手から、肉を潰し、骨を砕く嫌な感触が伝わってくる、そんなものを味わいたくないと思いつつも、あいにくと彼は首を斬るための武器は持ち合わせていなかった。いや、持とうとしなかった。

拳より剣、剣より弓、人は自らから離れるほど、相手の死を考えな

くなってしまう。拳で殺すことが出来なくとも、人は案外と簡単に矢で射殺してしまえるものだ。殺す感覚を、忘れたくなかったから、彼は武器を持つことはしなかった。その首を高々と掲げる。

「よく聞け！ てめえらの大将は獲った！ この戦いは負けだ！ 別に捕らえやしねえ、追いもしねえ……わかったらとつとどうせやがれ！」

その声を聞き、呆然とクーゲルを見上げていた兵は、やがて次々と剣を手放していった。

すさまじいまでに、鮮やかで、豪快に、戦いをクーゲルは終結した。やがて兵は我先にと撤退を始めた。

「さあて、ひと段落ついたか。ここら辺に、死体は少ねえな。ヴォーグに合流して討つか」

腕を振り一度鋼を霧散させる。

来た道を引き返し、クーゲルは門の中へと入っていく。

戻る最中、敵に遭遇することは無かった。

ヴォーグに近づくにつれ、クーゲルの鼻につく血の匂いは濃くなっていた。

屍の中に佇むヴォーグの、様子がおかしいように感じた。

悲しみにくれ、喪に服すかのような優しさと、喜悅して人を殺す殺人者の残忍さが混ざった異様な殺意が浮いていた。

「おい、てめえいったい何してやがる！」

ヴォーグの周りに立っているものは何も無く、大地に全てがひれ伏していた。

誰も生き残ってはいない、全滅。

ヴォーグの戦闘は、戦場における勝敗を決めるための戦いではなく、全てを消し去る殲滅行為、一方的な虐殺だった。

かなりの人数に、背中から斬られた跡があった。それは、ヴォーグが、逃げることさえ許さず、全てを殺した証拠だった。

「何で全員殺した！？ こんなことする必要は無かったはずだろ！」

全員を殺す必要は無かった。現に自分は最小限の死で戦いを終わらせた、そう考えた。

「平和を望まぬ彼らへの、手向けだ」

ぼそりと、つぶやくように、いう。だが、別に自信が無いというわけではなかった。

ヴォーグは、自分のその言葉に嫌悪していた。自分は、殺すことしか出来ない。

だがクーゲルに心までは見えていない。ただ、苦し紛れの言い訳をする子供のようにしかうつらなかつた。見えていたにせよ、そんな考えを持っているヴォーグに怒りを覚えているだろう。

「ハア！？ 殺しといて手向けだ？ ふざけんな、死んじゃおしまいだろ！ 生きていてこそ意味がある！」

心底腹の立つことといってやがる。何で殺しやがる。すぐ殺そうとする？

怒りで殴り飛ばしたくなる衝動にクーゲルは駆られた。

急に、空に暗雲が立ち込め始める。

彼らは、生を尊ぶ者と、死を尊ぶ者という、相反する根底の信念ゆえに、不仲なのかもしれない。

「だあ！ 腹が立つことが次々と！！ てめえ、後でぜってえ聞くからな！ 納得できなかったら殴るだけじゃすまさねえぞ」

ヴォーグに対してではなく、これから来る何かにクーゲルは戦闘体勢に入る。

暗雲に呼応するように、戦によって堕ち、魔力が濃くなった空気があらぶり、次々と死体の刻み込まれていたある一つの痕章が怪しく輝く。

堕ちてしまった魂が、それに吸い寄せられるように取り込まれ、肉塊が奇妙に脈打ち始めた。

やがて、意思を持って蠢き始め、大きな塊へと寄せ集まっていく。痕章の刻まれていないこちら側の兵の死体さえも巻き込み、それらは肥大していく。

だが、不思議なことに、巻き込まれも、蠢きもしない死体があった。それは、ヴォーグが殺した兵の死体だった。

理由は、すぐにわかる。必ずといっていいほどに死体や魂に残る魔力が、全く無いのだ。

それらの魂、屍は、魔力に反応して発動している痕章の影響を、受けることがなかった。

「どういことだ？ 何で、堕ちてねえ？」

「俺の力だ。魔力を、全て、背負う」

「んじゃてめ！ まさかそれが理由で！」

背負う、それは、殺すことによって力を手に入れることに等しい。今にも殴りかかりそうな剣幕でクーゲルが怒鳴る。

「違う、力が欲しいわけじゃない。ただ、救いたいだけだ」

吐き気がする言葉だ。クーゲルは、胸倉をつかもうとするが、ヴォーグは後ろに飛びのきそれを拒否する。その後ろ、東側に集結させていたバレイルの兵が目に入る。

「そんなんで、何が救えるって言うんだよ！？ ……！？ やべえ、兵がアブねえ！ 退かせるぞ！」

すでに肉塊は一つ一つがしっかりとした異形の者へと形を変え始めていた。

そして、それが完成すれば、普通の兵では、太刀打ちが出来ないものだった。

天高く、合図の爆発を起こす。

「早く橋を降ろせ！ 全員入れたらすぐ上げろ！」

橋が降り始め、東側に集結した兵士たちが橋へと駆けてきていた。これまで体験したことのない異常な事態に顔には恐怖が浮かんでいる。

その間も刻一刻と形を変えている。

「くそ……彼らの存在が頭から抜けていた」

「俺が気づかなきゃどうしてた！ まあ、無駄な話した俺のせいもあるが……。でもてめえは指揮任されたんだろう！ しっかりやれ

よ」

「すまない。……間に合ってくれ」

城壁の中へと兵が収容されていく。だが、後数十秒で、それは完成してしまう。

最後に、団長であるヴィレンの一团が橋を渡りきると、橋が上がり始めた。ちょうど、それは完成した、ギリギリのタイミングだった。幸い、彼らが自らで状況を判断し退避し始めていた為間に合った。形を成した肉塊は、全身を鎧で固めたような二足で立つトカゲの姿をしていた。

それは、魔兵といわれていた。

奏魂術といわれる、禁忌の技に属する痕章によって、死肉を憑代として、魂を取り込み、大地と混ざり合い、魔力によって作り出される、冥界より呼び出された異形の兵たちだった。

彼らは、戦によって作り出された魔力によって、さらに強大化する。戦がひどければひどいほど、戦場が血で黒く塗りつぶされるほど、魔兵の力は増す。

ディートはその秘儀を、自ら率いる兵团に授け、戦わせていた。

そして、それが、ディートの軍勢に大敗を喫する理由、人間との戦いで兵力を割かれた上で、さらに魔の軍勢が押し寄せては、いくら人同士では優勢であっても、戦況を覆されてしまう。

大量の魔兵が、一斉に天高く咆哮を上げる。

それが、再び起こる戦いの幕開けとなった。

第四章 第七話

同じ時、戦場の中でも際立った美貌を持つ女性の周りでも、魔兵の咆哮が上がった。

人との戦いでさえ開かれることのなかった目が、ゆっくりと開かれる。

その瞳に、十字をかたどったかのような痕章の蒼い輝きが生まれる。その輝きは、瞳の奥底から輝いていた。そしてアーリアは、その痕章を通して、あらゆる物を、視る。風の流れ、温度、遠方の情報、心理に至るまで、すべての事象を視ることが出来た。

力はさらに強くなり、やがて、一線を越える。時の障害を越え、次に起きる事象まで、アーリアの瞳に移り始める。彼女は、様々な未来の、可能性、まで見ることを可能にしていた。彼女は、無数に枝分かれする可能性の中から、自分に一番有益な可能性を導き出し、可能性から結果になる前に、自ら結果を選択した。つまりは、アーリアは、未来をみつめ、自分が生きている範囲の未来を選ぶことが出来た。

それは、アーリアでなくては決して出来ないことであつた。もし他の者がその痕章を持ち得、なおかつ可能性をみつめることができたとしても、常人では、可能性を選ぶ前に結果になってしまう。見えていたことが過去のことになってしまふのだ。元の能力の高さに加え、感情を廃し、自らにとって有利に働くことのみを取捨選択で選ぶ思考でこそ出来ることであつた。

両腕の内、唯一伸びた右袖の肩あたりを左腕で押さえ、右手の甲を前に向ける。そして大きく上から下に振るつた。流れるように袖から何かがアーリアの手に滑り込み、それをアーリアはしっかりと握り締める。

それは、取っ手のついた銀色の箱のようなものだった。精緻なレリーフが施された箱の前には二つの穴が開き、取っ手には指で押さえ

るような形状をしたものがついていた。

正面に片手で構え、トリガーを引き絞る。

高質量の金属が激しくぶつかり合ったかのような、重く鋭い音と共に、アーリアの腕が衝撃で少し持ち上がる。

音を発した弾丸は、蒼い一筋の光条となり、過たず魔兵の頭に着弾した途端、まばゆい光と共にその頭を弾け飛ばした。

彼女の持っている武器、それは十字の守り手と呼ばれる、銃、という代物だった。

十字の守り手とは、名のごとく銀翼十字のものが護身用として持っているものだった。修道士たちの修行の初期段階で、法力の制御の精度を高めるために、修行の一環として二発の銃弾を作り出し、使われることなく護身用として身につけているはずのものだった。本来の守り手には、人を殺す破壊力も有していないが、彼女は改良を加え、女性の手に収まるサイズだった物を、拳二つほどの大きさにまで銃身を巨大化させ、一撃で魔兵を殺すほどの破壊力を生み出していた。

もう一度引き金を引くと、銃火が迸り、次の瞬間には魔兵の胸に穴が開いた。

二連装の銃身には、弾の込め口や、弾倉が無い。

護身用に用いた場合は、二発限りのものでしかないのだ、だがアーリアは両手で守り手を前に掲げると、一度の深い深呼吸と共に、数ヶ月を費やして生成する法力の弾丸を、たった一瞬で銃の中に紡ぎ出す。

火薬の実用化がされてなく、銃というものが十字の守り手しか存在しない中では、アーリアのそれは個人が持つ遠距離の武器では最強を誇った。

アーリアは一体の魔兵が避け、その後方にいる、ほかの魔兵が着弾するという未来を視る。その未来に沿うように、避ける魔兵の方向に引き金を引く、さらに避けた先にも弾丸を放しておく。見事に二体の体が碎け散る。

アーリアが撃ったたび、それは確実に命中し、次々と魔兵の数は減る。唐突に、引き金を引く手を止めると、アーリアが巻き戻しのようになり出すときと一部の誤差も無く同じ動作で銃を納め、目を閉じるとそのまま佇んでしまった。

まだ、戦いは終わってないというのに、ただそこに立っているアーリアを見つけ、そばにいて戦っていたクーガが駆け出す。彼の速さは、真に神速の如き速さだった。

数十の魔兵の間を一足でもって駆け抜け、アーリアに爪を振り下ろした魔兵に二十数の斬撃を与えるまで、瞬きの間も許さぬほど。

「戦わないと死んじゃうよ！」

「終わったわ」

「え？ アブな……え！？」

再度、アーリアの首に迫った爪は、クーガが止めることなくその動きを中空で止めた。

トカゲの姿をした魔兵は、すべてが動きを止め、朽ちていった。

「本当だ、終わった……なんで……」

啞然とした声を上げて、クーゲルは立ち尽くす。

なぜわかったのか問いかけたかったが、あまりの驚きに言葉を失っていた。

「この眼は、未来を視るわ」

「こうなると分かって？ でも、僕が助けなきゃ、アブな……あっ！？」

言い終える前に、自分の助けまで、アーリアには視えていたことを感ずく。

確かに、彼女の戦いの中での動きは、あらかじめ動いていた、とても言うような的確さだった。卓越した術を身につけた者ならそのように錯覚させることもあったが、アーリアはその術を身に付けつつ、なおその力を使った。敵の攻撃は当たりもしないし、銃弾が外れることも無いはずだ。

「すっげえなあ！ そんなの最強じゃん！」

「……」

再びアーリアは沈黙する。ここでの無言は、力への自負とも取れるが、彼女にそんなものは無かった。ただ話に興味が無かった。

「……ああ、腹減った〜!」

緊張が解けたせい、クーガの腹の音が周りに響き、彼は地に大の字に横になった。

既に瞳は閉じられ、倒れこんだ音のみでクーゲルの動きを察知する。それとなく顔を向け、眺めているかのようにしばらく佇んでいた。

「あ……」

不意にクーゲルの元へ歩み寄り始める。彼女の行動は、全く無駄がない、それにより全ての挙動が不意に動いたとしか感じられぬほどに。そばに来るまで、気の緩んだクーガはその動きに気づかなかった。

「どうしたの?」

脇にかがみこむと、今度はクーガの両腕を押さえつけ、顔を体に近づけ始めた。

「え? ちょっと!? なに?」

あまりに不可解な行動に、クーガは混乱していた。胸の上の辺りにアーリアの頭があり、首を動かすとあごを当ててしまうため、様子さえ確認できない。

突如襲った感覚に、思わず体がはねる。何かが這い回るような感覚、それも服越しではなく、直接肌に当たっている。

その感覚と共に、軽い痺れも感じた。アーリアは、裂けた服の隙間から、クーガの傷口を舐めていた。

アーリアは、大量の死体と共に広がる、凄惨なまでの戦場の血の臭いから、かすかに香る生きた人間が流している血の臭いをかきわけ、クーガの傷を悟っていた。

全く持って理解不能の行動に、クーガの頭の中は破裂寸前だった。

「な…な!? なんで舐めてんの!?!」

そのひどく艶かしく感じられる行為に、顔も真っ赤になる。クーガ

の中での最高心拍数も記録が更新された。

今、クーガは、自分の心臓の音と、舌と傷口が触れるかすかな水音、彼女の舌の感覚、肌にさわる彼女の息だけに感覚が埋め尽くされていた。

「傷」

問いに關しての答えは、たった一言、というよりも単語。

「意味がわからない!？」 傷があるからって、何でさ？」

「癒すことは出来る……けど不得手。汚れが入ると危ない」

再度のクーガの叫びを、説明の催促と受け取り、簡潔に詳しく説明する。その声色は至極平淡。

「水で流せばいいじゃない」

今度はしばらく動きが止まった。周囲を確認する。

再び視線、彼女は目を開いていないので少々語弊ではあるかもしれないが、視線をクーガに戻した。

「今、水ある？」

「はい、すいませんでした。そんなものここにありません」

抑揚が全く無く、あまりにも端的なアリアの口調は、威圧感さえ感じられる。

もういいと判断したか、両手を傷口に向け、法力を発揮する。

不得手といったわりには、その癒しの速度には目を見張るものがあった。アリアの持つ多量の法力が、癒しの速度を助長している。

傷の治癒が終わると、何事も無かったかのようにアリアは立ち上がる。彼女には、一般的な常識が欠落しているようだった。

クーガは、押さえつけられたままの格好で、全く動かない。今の出来事に頭が追いついていなかった。

立ち上がると、既にクーガを残して何の気配もなくなった戦場から、アリアは一つの視線に気がつく。

その視線から感じられるのは、あからさまな敵意と、こちらを探るような気配。

目をもう一度開き、山の中腹辺り、木立に佇み、望遠鏡を用いア

リアたちを伺う一人の男を見つける。

その場所をはるか遠く、望遠鏡を使っても人が蟻ほどにしか見えな
い距離にいる男を、まるで目の前にいるかのようにはっきりとア
リアは視る。

その男に向かってアーリアは銃を向けるが、あえて撃つことはせず、
再び袖の内に閉まった。

「どうしたの？」

寝たまま、頭だけを起してクーガが聞いてきた。

「なんでもないわ」

アーリアは、一度クーガへ顔をやるが、そのまま放って一人で鉋都
へと引き返していった。

第四章 第八話

南側の城壁の守護に当たっているヴォーグとクーゲルに、魔兵の集団が迫る。

トカゲのような姿をした魔兵、爪魔は、武器である赤黒い色をした長い爪をかき鳴らし、爬虫類独特の低い姿勢で、得物を貪らんと人であるヴォーグらへ駆け出す。

その動きは俊敏で、常人では目で追うのがやっと、体では反応できないほどの速さだった。

ヴォーグらはそれを橋が降りていた堀の前で迎え撃つ。

魔軍と対峙したときの、一番の対処法は、術を発動させた後方にいる複数の人間を発見し、発動用の痕章とともにその人間を殺すこと。よって奏魂術を終わらせることだったが、魔兵の機動力は高く、また数は多い、その場を離れればバレイル自体に危険が及んでしまうため、ヴォーグらは身動きが取れない状態だった。

喉元を狙って放たれた爪を紙一重でクーゲルは避けつつ、交差するように踏み込んで胸板に右拳を叩き付ける。

密着した状態で爆発が巻き起こり、固く覆われた魔兵の体に風穴が空く。

続いて両手を大きく広げて迫る魔兵に、一瞬だが魔兵の速度を越える踏み込みで近づき、ヴォーグは片腕のみでその体を斬り上げる。

魔兵の体の右腰から左肩に剣閃が走り、走行の速度を残したまま二つに崩れ落ちる。

ともに一撃で同類を葬られたことに警戒し、魔兵は咆哮を挙げつつ間合いを取る。

やがて一定の距離を離れると、数体が高速で周りを走り出す。死角を埋めるようにヴォーグとクーゲルは背中を合わせた。

「あんま時間がかけらんねえってのに、意外と頭がいいな。今度は攪乱か？」

「そのようだ」

一言言葉を交えようと、襲撃に備えて気配に集中する。魔兵が、動く。

攻めに転じたのは四体、ヴォーグの正面から一体、クーゲルの左右から二体、もう一体は跳躍力を生かしてヴォーグの上空から急襲した。

ヴォーグは、上空の相手に対し突きを放つと、その体勢から体をひねり込み、振り下ろす。地上から接近する魔兵の頭上に、半ば振られたような状態からとは思えない剣速で剣を振り下ろす。

クーゲルは、先ほどと同じように右側の爪魔に穴を開けると、そこに腕を引っ掛け、後ろに迫るもう一体に投げつけ、鋭い踏み込みから二体を巻き込んでの渾身の一撃を振りぬく。

その後も戦いは続くが、いっこうに魔兵の数は減らない。

「ちっ、数が多いな、一体でも漏らすとやべえってのに」
あまりの数の多さにクーゲルが嘆息する。

「終わらせる。準備に時間がある」

ぼそりと呟くが、かろうじてクーゲルの耳には届いていた。

「何をするつもりだ？」

その呟きに怪訝がる。

「もう一つの、力を使う」

そう告げると、ヴォーグの左腕の、『刃を閃く者』と重なるように刻まれていた死痕、『刃を示す者』が、蒼く輝き始める。

二つの死痕をまたぐように描かれた長い一本の文様は、どちらの力を用いようとも輝き続けている。だがその腕に疾る一本の線は、文様というよりも、まさに傷痕のような、歪さが感じられた。

ヴォーグの左腕が小刻みに震えだし、籠手の内側から、血が流れ落ち始めた。

「しょうがねえ、速くしろよ？ 別に俺ひとりじゃまずいってわけじゃねえぞ」

「ああ」

返事と同時に、ヴォーグは目を閉じる。

体の中を荒れ狂う魔力の奔流を意識し、死痕に沿わせ、一つの流れを作り出す。

魔力が死痕を更に深く刻み込むかのように、左腕から流れる血の量が増す。

そしてその、一つの力へと変えられた魔力を、剣へとみなぎらせていく。

うつすらと魔力の光を帯び始めたところで、右腕で大地に突き刺す。クーゲルは、ヴォーグを守るように、広範囲に爆風を撒き散らし、敵を寄せ付けようとしない。一撃で四肢を吹き飛ばす爆発に、さすがの爪魔も攻めあぐねていた。

剣に魔力を乗せ、ヴォーグが力をこめると、ゆっくりとだが、確実に、まるで何かに引きずり込まれるかのように、剣は地を貫いていく。

やがて剣は、柄までも地に吞まれた。

その時、ちょうど振り向いたクーゲルが、剣が消えたという状況に啞然とした。

「おい！ 剣はどうした？」

神経が研ぎ澄まされていたヴォーグに、その声は届いていない。

左腕を、剣が吞まれた場所に掲げる。

大地が左腕を伝い落ちる血を吸い始める。

そして、つぶやく

「深淵の闇よりいずる鎮魂の龍よ、命持つ魂に安寧の闇を……」

突如、まるで、自らの内を蠢く何かに恐怖するように、大地が揺れる。

ヴォーグの剣が埋められた場所を中心に、地面から蒼い光が漏れ出す。

それは、圧縮されるように地表に収束していき、やがて一つの大きな蒼い鏡のようなものと化す。

爪魔達が、その鏡に向け吼える。そこには、言い知れぬ恐怖が浮か

んでいた。

クーゲルでさえも、鏡の持つ何かに、恐怖を感じていた。

一度形を成して収まったかに見えた蒼い光の奔流が、一段と強く光った。

瞬間、鏡が破碎音とともに碎け散ると同時に、黒い何かが空間をよぎる。

咆哮が、あがる。心を握りつぶすほどの圧迫感と、世界そのものを滅ぼさんとする殺意のこもった凄絶な咆哮が。

空を見上げると、そこに、咆哮の主はいた。

腕を組んだ仁王立ちのような姿勢で滞空し続ける、雄々しき姿の黒龍だった。

その力強くも洗練された細身の体躯に刃のような鋭さを持った鎧の如き甲殻を纏わせ、その背には自らを支える巨大な翼とともに、一対の巨大な刃が伸びていた。

瞳は、ヴォーグと同じ紫紺の輝きをもち、見るもの全てを萎縮させる力を放っていた。

「あれも、魔兵……なのか？」

かすかに、クーゲルの声が震えていた。だが、それは恐怖からではなく、憤りにも似た怒り。

絶対悪とも呼べるほどの、強大な魔力が集結し、龍の姿をした魔兵が空をまたぐ。

魔兵は、禁忌である奏魂術の一端を使った、堕ちた力の一つであり、それを呼ぶことは、ヴォーグが、敵と同じように魂をおとしめていくことになる。

「てめえは一体……なにしてやがる！？ 魂を利用してるってのか！？」

戦況よりも、クーゲルの中で怒りが優先し、魔兵の行使を止めようとする。

冷静すぎるとも言っている目で、ヴォーグがクーゲルを見返す。

「違う……。これは、魔龍屠は、俺の魔力だけで、呼んだ者だ。」

魔力だけで、魔兵を、ましてやここまで強大な者を呼び出すには、大きな戦がいくつも起こって、やっとといえるほど異常な量の魔力が必要になる。それを、ヴォーグ一人で持っているとは、クーゲルも想像できなかった。

「本当なんだな？」

「ああ」

ただ、ヴォーグはうなずいた。信じるとも言わず、信じるか否かは、クーゲルに任せた。

「わかった」

了解するも、ヴォーグの力は、クーゲルのとって許せるものではなかった、なにが許せないのかは、漠然としすぎて把握できず、ただ言い様のない怒りが、腹の底で停滞し続けた。

「魔龍屠、敵を……鏖せ」

空を見上げながら、ヴォーグは自らが率いる、最強の魔兵の名を呼び、命ずる。

ヴォーグの声に応じ、大地を見下すと、黒龍は身を翻し垂直に降下し始める。自由落下ではなく、翼をはためかして加速し、空を裂くほどの速度で、巨大な体が落下する。

そして地面につく瞬間に、手を前に突き出し掌底を地面に打ち付けた。

それだけで、敵は十ほど跡形もなく消し飛び、地面は削り取られ、無数の斬撃に傷付けられたかのようになる。巨大な粉塵が、細切れになった魔兵を巻き込み、舞い上がる。

粉塵の中、影がゆっくりと起き上がる。

そして、殺戮への歓喜に、天へ向け咆哮をあげる。

咆哮により、粉塵は一瞬で薙ぎ払われ、魔龍屠の黒き体躯があらわになる。

その姿を見て、爪魔達はたじろく、だが、闘争本能は消えず、遠吠えのような、魔龍屠の前ではか細く感じられる咆哮をあげ続ける。いくら意思があろうと、人が呼び出した傀儡に過ぎない魔兵には、

死を免れるために逃げるといふ行動は備わってなかった。

黒き龍の、その爪は、大地を切り裂き、その牙は、敵を穿ち、その咆哮は、空を薙ぎ払った。

ヴォーグが呼び出してから間もなく、大地はずたずたになり、爪魔の半数は倒れた。

やがて、爪魔は魔龍屠を自らの手に負える相手ではないと判断し、何体かを囷に出し、武器を持たないヴォーグへと戦力をむけ始めた。ヴォーグの左腕から流れる血は地面に血溜りを作り、すでに少なくともはないう量を流していることを悟らせた。だが、彼自身は何も気にしてないかのように、平然と立っていた。

「お前は下がってろ、素手じゃ戦えねえだろ？」

クーゲルがにと歯を見せる笑みを見せながら、ヴォーグをかばうように前に出る。

「心配ない……」

ヴォーグはそれを見せず、クーゲルの脇をすり抜けて前に飛び出し、迫り来る敵陣へと駆け出していった。

大きく踏み込んで鋭さのある回し蹴りを放つが、それにあわせるように爪が振り下ろされてくる。

だが、それを避けようとはせず、ヴォーグはそのまま足を振りぬく。次に起こる出来事は、爪に無残に切り裂かれ、倒れるヴォーグの姿、はずだった。しかし、実際には逆の事態が起きる。その爪ごと、爪魔は、ヴォーグの足で切り裂かれた。

『刃を閃く者』の力の発動は、刻まれたその身として例外ではなかった。

もどが刃ではない分、力が分散しやすいものの、素手としては絶大な破壊力を有していた。

目の前にいる敵の首に鋭い左肘での突きを放ち、続いてわき腹への右回し蹴り、更に蹴りの力でそのまま回転し、くず折れた爪魔の鳩尾を回転で威力の乗った左足刀で射貫いて吹き飛ばした。流れるような連撃が、次々と爪魔達に繰り出されていく。

ヴォーグの奮闘振りを見てクーゲルは目を見張った。

その斬撃を乗せての格闘は確かに珍しかったが、目を引くところはそこではなく、ヴォーグの動きにあった。

一つの武具を極めんとするものは、他の武術、特に無手での格闘戦がおろそかになることがままあったが、ヴォーグは、『刃を示す者』の力の発動時を想定してか、しっかりとした鍛錬がなされていた。

動きには鋭利さがあり、まるで力など無くても触れるものを斬り裂いてしまいそうだった。

渴きが、体と呼んだ。

クーゲルは、戦うことを欲していた、その、強すぎる力と、自分を交えることを望んでいた。

本来彼は、喧嘩という類のものが好きだった。命の奪い合いというより、力量を比べる、殴り合いの喧嘩を好んだ。

血が騒ぐ、強い相手と、戦いたい、全力を出し切りたい。

ヴォーグへ向け、その足を踏む込もうとするが、思いとどまる。

今は、そんな、味方同士で、殺しあうなど、単なる愚行、拳を向けるのは、ただ敵だけ。

まだ、自分のやるべきことは、復讐は、少しも終わっちゃいない。

こいつとやんのは、その後だ。

左の拳でこめかみを小突いて思考を切り替える。

戦況を見る。ヴォーグが攻勢に回っているため、漏れてこちらに来た敵を迎撃することが良策と判断し、堀の近くまで下がり、どっかりとクーゲルは身構える。

ヴォーグが戦闘を繰り広げているほうとは別の方角から、数十体の爪魔が押し寄せてくる。

クーゲルは重心を低くし、右拳を左腕で支えて突き出し、意識を収束させていく。

空間に赤い光点生じ始め、徐々にその数を増やしていく。

そして光点は収束する意識に引き寄せられ、拳の前の空間に集まり始める。

点はやがて、拳大の光になり、圧倒的な力によって周囲の空間を歪ませる。

「貫く!!」

撃鉄を起こすがごとく、拳を引き絞る。左腕は前へと突き出し、敵への狙いを定める。

引き切った拳を放とうとした瞬間、周囲に異変がおき、クーゲルは狙うべき敵を失い蹈躡を踏んだ。

異変は爪魔の体に起きていた。動きが固まり、痕章が一瞬強く輝いた後、光を失い、そして、解け崩れていく

痕章の光が消えたことは、制御を行なっていた痕章の力が失われ、冥界との繋がりがなくなったことを意味した。

魔兵の姿はもはや原型をなくし、解け崩れた肉片は魔力の黒い煙の筋を立ち上らせながら干からびていき、やがて灰と化して風に吞まれていった。

その時、突風がクーゲルの真正面から吹きつけ、砂塵を避けるため腕で顔を覆った。風が止み、腕をどけるともうそこに魔兵がいた跡は何も無かった。

「? ……何でだ?」

疑問の理由は、その、奏魂術の発動者をいったい誰が殺したかというものだった。

一介の兵士では魔兵の壁を抜けられるはずもなく、現在は全員が街の中にいるためにありえないことだった。

ほかの可能性は、ヴォーグとクーゲル以外に戦っていた二人、クーガとアーリアだった。

しかし、考えられる方法が無かった。

確かに、街への守りを捨てて発動者の掃討を優先すれば可能だが、それでは、街に被害が出てしまう可能性が高い。しかし、街の中に混乱が起こってる様子は無い上、クーガたちがそんなことをするとは考えにくかった。

次に、一人が守りに回ってもう一人が攻める方法だったが、魔兵の

数にもよるが戦魂騎士団二人で守勢だったものを一人で抑えられるとは思えない。

なら、なぜだろうか。

「終わったんだからまあいいが、一体なんだってんだよ？」

あまりにも情報の無さに、クーゲルは深く考えるのをやめた。

あきれた声を出しつつも、兵に知らせるため、勝利を意味する拳をクーゲルは空に掲げた。

戦いは、バレイルの勝利だが、わだかまりを残す形で、終結を告げた。

第五章 第一話（前書き）

長らくお待たせしました

本当に、期待していた方はすいません

なんかもう、これぐらいしかいえない・・・

第五章 第一話

戦いの勝利への先導者、ヴォーグたちは手厚く街に迎え入れられた。ヴィレンほか数名の兵士と、ヴォーグたちで砦都の中心を縦断する大通りを歩いていった。なぜか、その中で、いつもは一番動き回っているクーガは、ただ回りの動きに従って動くだけで、黙り込んだまままだ。

ヴィレンがヴォーグたちを先導して道を作る。

大通りは何かの行事のように人がひしめき合い、ヴィレンは道を作るのに苦労していた。

「これは、夜は宴だな」

そんなことをヴィレンがぼやくが、周りの騒音にかき消されて誰も聞こえてはいなかった。だが、もう街の住人たちの意思は決まっているようで、その言葉を聞かずしてすでに宴が催されることは決まっているだろう。

「あんた、もしかしてクーゲルかい？」

中年の女性が、賞賛される集団の中にいる見知った顔に声をかける。

「おう。久しぶりだな。あんたは変わってねえな。相変わらずうるさい」

はにかむような笑みを見せながらクーゲルは返事をする。

「みんな！！ 帰ってきたよ、やんちゃ坊主のクーゲルが！！」

大声で女性は周りに知らせる。

「もうちょっと年食ってから俺はここを出てっただろうが」

そんな呆れたようなつぶやきも無視されて周りに人が集まってくる。

「本当だ、クーゲルじゃねえか！？」

「久しぶりだな、たくましくなったな」

「あっちで馬鹿なことはやってねえか？」

「お帰り！ クーゲル！」

「ずいぶん出世しちまって、この俺も鼻高々だぜ」

さまざまな人から声を掛けられ、戸惑っている様子だったが、やがて、全員に聞こえるような、はっきりとした口調で、一つ言葉をつむぎだす。何よりも大切な、一つの言葉。

「……ただいま」

その言葉に、周りは安堵し、クーゲル自身も安堵していた。

「私のとこの宿に泊まっていけないかい？」

一番初めにクーゲルの存在に気づいた中年の女性が、明るい口調で聞いてくる。

「いや、決めているところがある、悪いな」

「あら、あの子のところかい？　じゃあ、しょうがないね。夜はあまりはしゃぎ過ぎないようにね！」

どうやら事情はわかっているようで、押しの強そうな印象の女性だったが、強引な誘いはせず、すぐに引き下がった。

「わあってるよ、いちいちうつせえな、あんたも」

女性の、ちょっとした下ネタにも動じず、というよりも浮かれて気づかずに、クーゲルは嬉しそうにしていた。

第五章 第二話

「みなさん！ 道を空けて！ こんなんじゃここ通るまでに日が暮れちゃいますよ！」

絶え間なくやってくる人の波に、呆れた様子でヴィレンが声を上げる。

「そういや、これからどこへ行くんだ？」

「これからバレイル、我等が領主様の所へ出向いてもらいます、今回の戦いの英雄を、この目で見たい、と申しておられましたか？」
周りの雑音に負けぬよう、大声で、ヴィレンとクーゲルが受け答えをする。

「んなもんとつとと終わらせて、俺は会いたいやつがいるんだ、こいつ等さっさとどけるぞ」

「手荒なことはよしてくださいよ！」

「大丈夫だよ」

にっと歯を見せる、意地の悪そうな笑顔をして、クーゲルが手を上げる。

上空から、耳を劈くような爆音が轟く。

大衆を退けるためだけに、力の行使をしたのだ。もちろん、ほとんど音のみに爆発のエネルギーを集中し、念のためにはるか上空で爆発させ安全を図ってはいたが。

唐突に起きた巨大な爆音に、民衆が体をすくませていた。

「あなたは何でそういうのも粗雑で乱暴なんですか！！ みんなすくんじゃってますよ！？」

「ああ？ なんだ、聞こえねえ。とにかく今の内に抜けちまうぞ」
クーゲルの破天荒な行いに啞然とし、爆音に耳を押さえながらヴィレンが怒鳴るが、その言葉を自分も爆発の音のせいで聞こえないと言っても言うように無視し、クーゲルが走り出した。

一瞬、啞然となったが、ヴォーグらも、仕方なく後を追いかける。

そして、凱旋した兵士が民を尻目に街を駆け抜けけるといふ例を見ない暴挙が行なわれた。

しばらくの後、領主の控える城の門が視界に入る。街の規模の割には、その城は質素な規模だった。

城は必要最低限で十分、それ以上では民の生活が狭くなってしまふという、領主の考えが基にされた城だった。

その城門に、人の姿が見える。

最初は、門衛だと思っていたが、近づくにつれ、服装が門衛にそぐわない物だとわかった。

「イウバルト様！」

質素だが、気品あふれる衣装を身につけ、初老の男性が立っていた。領主としての威厳と、その胸に、領主の証である紋章をぶら下げていた。目の前にいる男が、砦都バレイルの領主その人であった。

ヴィレンらバレイルの兵が、その姿に近づき跪き、頭を深々と下げる、その姿には領主への敬慕の念がこもっていた。

「よく、かえって来てくれた、そなたらの命が、今ここにあることを私は誇りに思う、さあ、立ち上がりなさい」

「ありがとうございます」

ヴィレンは感極まったようで、少し、体が震えだしていた。ゆっくりと立ち上がると、領主イウバルトは、その体を深く抱擁した。

「こ……困ります！ お体が汚れてしまいます！」

戦場からそのままこの場に来ていたため、いくら鎧を脱ぎ、多少なりとも拭いてあっても、その体は人の血と泥に汚れていた。

あわてて体を退けようとするが、領主の体を押しつけるわけにも行かず、ヴィレンは四苦八苦していた。

ようやくヴィレンを開放すると、イウバルトは大きく息を吸った。

「民が、泥に汚れ、この地を生かし、血を流し、この地を守るといふのに、この私が汚れずして何が領主といえようか！ 私も、この地に生きるものだ、この地を守るために、ともに戦いたいものだ。

……とはいったものの、所詮は口だけにしかならんがな。」

領主としての意思と、生きるものとしての誇りを、イウバルトは語った。

「それも困ります。あなたが戦場に出て、私たちは命を賭けて守りますが、もしあなたが命を落としてしまったら、誰がバレイルを導くというのですか！」

「まあ、そうだから、口だけに、なるのだがな」

そういうとイウバルトは、首を掻きながら快活な笑い声を上げた。クーゲルもつられて笑っていた。

「いや、これは失礼。騎士殿、よく、我が街を勝利に導いてくれた。私は、ここの領主、イウバルト・ヴァーライル、この地を代表して、あなた方を歓迎しましょう」

イウバルトがクーゲルに手を差し出すと、それに答えて握手をした。「さあ、まずはあなた方の話を聞きたい、この地に駆けつけそのまま戦闘を行なったのならさぞかしお疲れになったでしょう。食事でしながら、ゆっくり聞かせてもらえますかな？」

「メシ！ メシだよ！！ 腹減った！」

急にクーゲルがはしゃぎだし、今まで俯き加減だったのが嘘だったかのように飛び跳ねる、しかし、しばらくしてお腹を押さえてうずくまり始めた。どうやら相当腹を空かしていたようだ。

「はっはっはっ、元気でいいな。なんでも君はよくがんばってくれたそうじゃないか。こちらでも張り切って食事を振舞おう」

「よっしゃ！ いい人だ！？」

目を輝かせながら、イウバルトに抱きつかんばかりにまたはしゃぎだしながら、城の中へ入ることをクーゲルが促していた。

「それじゃあ、早速我が城内へ案内しましょう」

「ええっと、俺は勘弁させてもらうわ、話ならほかのやつにも聞けるだろうし、いききたいところがあるんでな。それじゃ、後はよろしく」

クーゲルは街に向かってどんどん歩き出していた。

「ここは、いい領主を持ったな」

ヴォーグが横を通り過ぎるクーゲルにそう告げる。

「当たり前だろ」

片手を上げながら、振り返らないでそのまま行ってしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7471a/>

我が剣、友に捧ぐ

2010年12月29日14時19分発行